

---

# ヒトガキユウシャ

青色眼鏡

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヒトガキユウシヤ

### 【Nコード】

N2987E

### 【作者名】

青色眼鏡

### 【あらすじ】

妄想。妄想。夢想。幻想。絵空事だと嗤えるか。予兆。前兆。凶兆。奇兆。何処を探しても見当たらず。終焉。終極。顛末。結末。筋書き通りは赦さない。正義と悪と勇者と魔王。どれにも属さず、どれにも組せず、自分の利益を追求する。そんな僕の物語。

## プロローグ

一億二千万分の一。六十七億分の一でもいい。

日本の総人口分の僕。世界の総人口分の僕。

人が異世界に召喚される可能性はざっとこんなものだろう。

高く見積もっても、低く見積もっても、宝くじが当たる確立よりは遥かに低い。

そんな幸運。そんな不運。

僕には生涯関係のないものだと思っていた。

どうせ自分なんて……という卑屈な諦めではない。

心底どうでもよかっただけだ。

有り得ないことを思考の枠に入れるほど僕は夢想家じゃない。冷静に現実を見据えている。

なのに、なのにだ。

気がついたら、そこは異世界だった。

前兆、なし。

吉兆、なし。

瑞兆、なし。

凶兆、なし。

トラックに轢かれて死んだわけでもなし。

突然目の前に発光する扉が出現したわけでもなし。

夢の中で誰かに語りかけられるでもなし。

偶然出会った美人さんが実は異世界人でしたーってこともなし。

なし。なし。なし。なし。なし。なし。なし。なし。とにかくない。

ないもの尽くしの大安売りだ。

元の世界では、世間に掃いて捨てるほど存在する、ごくごく普通

の大学生だった僕。

朝起きた。

朝御飯を食べた。

大学の講義に出席した。

昼御飯を食べた。

バイトに行った。

下宿先に帰った。

晩御飯を食べた。

風呂に入った。

寝た。

徹頭徹尾、終始一貫、そんな毎日の繰り返し。

通常通りなら、先頭に戻って、四畳半の僅かに黴臭い畳の部屋で目が覚める筈。

ところが、起きたら異世界だ。

吃驚しすぎて言葉もない。理不尽すぎて涙が出る。

事前審査は不必要？ 適正検査など捨て置けと？

だったら文句は言わせない。

何が起きても、何をやっても僕に咎められる謂れはない。

相手は世界か、運命か、僕の代わりに責任は負ってもらおう。

建前は召喚。実態は、拉致、監禁、束縛。

予定調和は許さない。

大口開けて飲み込むからこんなことになる。

腹壊しても知らないぞ。

何事も事前にしっかりと確認下さい、だ。

## 1・コトノホツタン

「やった、ついにやった！ 成功だ！」

しゃがれた女性の声が耳朶を打った。

血生臭い地下室と思しき部屋。

窓はなく、通路と室内を繋げる錆付いた鉄扉は固く閉ざされている。

壁一面。床一面。所狭しと書き込まれた幾何学的な文様。

石室は鈍い橙色の明かりに照らされている。

その中心には僕がいて、僕の前には白髪を振り乱して喝采する老婆がいた。

老婆は黒いローブを着込み、削った木で出来た杖を突いている。

幼い頃、童話で見たような魔女そのものといった風体。後は山高帽があれば完璧だ。

そんな常軌を逸した光景を前にして、僕は、ただもう見つとも無く泣いた。

皺くちやの顔を、もう元に戻らないんじゃないかってくらいに歪めて狂喜乱舞する老婆と泣き喚く僕。

なんて嫌な光景だ。おぞましい。

一目見たら網膜に焼き付いて一生忘れられないこと請け合いじゃないか。

ぎゃあぎゃあ泣いている内に、今度は自分の声に異変を感じた。

高いのだ。とつくに変声期を迎え、野太くなってしまった僕のものとは似ても似つかない。

他に誰かがいるのではないかと狭い室内を見回すが、やはり僕と老婆の二人つきり。そもそも遮蔽物は何処にもないのだから、隠れようにも隠れられない。

ということは、これは、僕の声だ。

認めたくないが仕方がない。

思えば、さつきから奇妙奇天烈な周囲に目を奪われていて、自分の状態を碌に確認していなかった。

見るか。

見るぞ。

恐る恐る、掌を見やると、そこから生えていたのは長年連れ添った僕の掌ではなかった。

小学生の頃、図工の時間に彫刻刀で誤ってつけてしまった傷跡がない。友人とキャンプに行った際、バーナーの操作を誤ってつけてしまった火傷のあとがない。先日、包丁で切ってしまった傷がない。刻まれてきた歴史がない。

全体的に丸っこく、ぼつちやりしている。

そう、まるで生まれたての赤ん坊のような綺麗な掌。

おいおい。

慌てて両の脚を確認。

つるつる。脛毛の一本も生えていない。

さようなら、古い自分。こんにちは、新しい自分。

気がついたら、異世界に呼ばれていて、おまけに赤ん坊になっていた。

最悪だ。災厄だ。

実に笑えない。

極めつけは僕を呼んだのがどう好意的に考えても危ない人だったこと。

自分で言うのもなんだが、無垢な赤ん坊を前に血走った瞳で暗黒舞踏を踊るのは正気じゃない。

こういう時のお約束って、召喚される先は何処かの豪華絢爛な王宮で、可愛らしいお姫様がいて、伝説の勇者様が云々じゃなかったのか。

そもそも召喚のされ方がおかしい。

綺麗な光を放つ円形の魔方陣を使って、そのままの姿で喚ぶべきだ。

なんだ、この何かの血液で滅茶苦茶に書き殴られた記号は。整理整頓もあつたもんじゃない。どう考えても外法じゃねえか。

それとも、異世界人は誰でも召喚できるような割とポピュラーな存在なのか？

いや、先程の老婆の様子ではそれはない。

兎にも角にも情報不足だ。判断材料が少なすぎる。まずはこの老婆が誰なのか、何を思っ僕を喚んだのかを

「魔王様！ 私はやりました！」

頼んでもいないのに、解答を老婆が吠えた。

これは、あんまりだ。

早くも死亡確定じゃないか。

僕の所在は恐らく魔王陣営。魔王がいるなら勇者もいる。それはもうツーといえばカーくらい確立で。勇者というからには絶対チート気味な戦闘能力を備えているに違いないのだ。なんかやたらと強力な魔法と、悪いやつ皆殺してみたいな剣。

対する僕は大学生から赤ん坊にジョブチェンジ。ただでさえ低かった戦闘能力が今やマイナスだ。

「これで、これで、今貴方様が封じられてしまっても次の機会には必ずや、必ずや我等の悲願を！ 道は私が開きました！」

腰を折り、祈るように手を組んで誓う老婆。僕に勝手な期待をされても困る。

老婆は必死の形相で閉め切られた地下室の分厚い鉄扉の外へ言葉を投げかける。その間僕は完全に無視されていた。

「それでは、暫しの別離です」

未練を振り切るように勢いよく僕の方へ向き直ると、ロープの中から箒を取り出した。老婆の背丈より遙かに大きい。今までどうやって格納していたのか甚だ疑問だ。

箒を小脇に抱え、僕を抱きかかえようとこちらへ近づいて来る。

逃げたいが、逃げられない。赤ん坊の脚力では、相手が腰の曲がった老婆であろうと逃げ切ることは不可能だ。

一步。また一步。数歩で距離が詰まる。身長が赤ん坊そのものとなってしまうため、視界一杯に老婆の姿が広がった。

半ば諦めかけた僕が見ている中、突如、老婆の胸から剣が生えた。遅れて聞こえてくる、鉄扉が倒壊する音。

事態の推移を目で見て確認したいが、動けない僕の視界に有るのは老婆と鈍い光を放つ剣のみ。

ただ、誰かが、部屋に入って来たのだけは間違いない。

老婆の表情が苦痛に歪み、口の端から血の泡が零れる。

「な……どうやって……て」

「簡単なことだ」

老婆の背後にいる誰か、若い男の声。

そこに含まれる響きは嘲り。

「お前が儀式の準備で引きこもっていた間に、魔王は封印されたんだよ」

この破魔の剣でな、と付け加え、剣を更に深く捻じ込む。

老婆の瞳が、眼球が飛び出そうなほど、大きく見開かれた。

「何をやっていたかなんてお見通しさ。だから待ってたんだ。異世界人の召喚、そうだろう？ 全く有難い話だよな。俺がやるうと思っていたことを敵が勝手に実行してくれるなんてさッ！」

そして、哄笑。

彼の声は地下室の扉の外に広がっているであろう通路にまで響いた。

「随分勝手だよな。こっちの連中は。逃げないのをわかった上で俺を拉致して、自分達の為に死ねるか？ それで、俺が『ハイ、ワカリマシタ』と従うとでも？ 過大評価もいい加減にしるッ！」

偽らざる本心。それは、彼が発した心の底からの叫び。

男が荒い息を吐く。

老婆は口の端を吊り上げた。

「……生まれが違うだけじゃないか。……住んでた世界が違うだけじゃないか。なんでこんな目に遭わされる。勇者なんて名ばかりだ。



発射したら戻れない人間ミサイルに便宜上聞こえの良い呼称を付けただけ」

ぼたり。ぼたり。

老婆の体から抜け出る血液が血溜まりを形成し、冷たい地下室の床を濡らす。

「真実を知った、か。憐れだね。だから散々忠告したじゃないか。夢の国が在るのは夢を見ている間だけだ。醒めてしまったら、其処に在るのは冷たい現実。この世界でお前は人類じゃない。勇者という異端なのさ。訪れる繁栄を享受して良いのは人だけだ。だからアంతは 此処で死ぬ」

不意に老婆が晒い出した。

「てめえ、何がおかしいッ！」

憤る男に老婆は答えない。

途切れ途切れ、されど力強く、一心不乱に奇怪な言葉を発し続ける。

それが呪文の詠唱だと気が付いたのは全てが済んでからだった。

如何に強力な剣であろうと振るえなければただの飾りに過ぎない。

老婆に唯一の武器を突き刺してしまった男は今や隙だらけ。

命を振絞って放った必殺の一撃に抗う術など有りはしない。

閃光。

爆音。

土煙。

後に残されたのは、剣と無傷の地下室。

そして 僕のみ。

聖職者の朝は早い。

鶏が刻を告げるより早く起き、大聖堂で朝礼に出席しなければならぬからだ。

異端者で、落ち零れで、忌嫌われる僕であつても其処は、其処だけは皆と変わらない。叩き込まれた癖は劣等感と併せて簡単に抜けてくれないから。

屋根裏部屋。睡魔を振り払うように、簡素な木製のベットから体を起こし、窓越しに外を見る。

喉かな牧草地に水車小屋。

厄介払いで、田舎の教会に放り込まれた僕。

現状は変化せず。

「あー、またもや寝ても帰れず仕舞いか」

今日も、腹立たしいくらいに世界は平和だ。

たとえ其れが誰かの犠牲の上に成り立つものであつても、人は喜んで其れを享受する。

遙か昔、この大陸が生まれたときから魔族の王 即ち魔王は在った。

何代になるかわからない大勢の勇者が屍を晒し、幾度となく魔王は封じられた。

曰く、初代勇者は破魔の力を持った聖なる剣を振り翳し、一刀の下に魔王を封じた。

曰く、二代目勇者は尋常ならざる魔力を行使し、一言の下に魔王を封じた。

曰く、三代目勇者はその両方を兼ね備えていた。だが、心の弱き彼は力に溺れ人類に反旗を翻してしまふ。人对勇者。多くの死者を出した戦いは人の勝利に終わり、裏切り勇者は野垂れ死んだ。

曰く、曰く。繰り返し、繰り返し。

僅な差異はあれど、本質的には変わらない。

魔王の復活と共に勇者は召喚され之を打ち滅ぼす。打ち滅ぼそうとする。

そういうシステムがこの世界には存在した。

法則は揺るがない。規則は絶対。

如何に強力な力を持っていても何故か勇者は魔王を封じるのみ。決して倒さない。何故？

誰も疑問に思わない。おかしい話だ。

「　　つと、こんなこと考えてると罰が当たるんだっけ？」

此処は僕のような不敬者が管理しているとはいえ、紛いなりにも教会だ。

信仰心の欠片も兼ね備えていない僕だが、一応の気遣いはしなければ。

「客人も来ることだしね」

僕を手招きする暖かい寢床から体を引き剥がす。昨晚の内に井戸から汲み上げておいた水で顔を洗い、草臥れた簡素な法衣に着替えた。男の一人暮らした。朝の身支度なんてあつという間に終わる。

昨日配達されて来た書簡によれば、今日は教会本部からの使者が来るらしい。

面倒なことこの上ないが、対応だけはキチンとこなさなければなるまい。あんまり下手なことをして怒りを買ってしまえば、ペンペン草一本生えないような不毛の地に左遷されかねないのだ。今だつて十分僻地に追いやられてはいるが。

清廉潔白な教会。何人にも分け隔てなく接します。こんなものは表向きで、所詮は縦の社会なのである。

ほんと、建前ばつかりの世の中だ。

「何人たりとも勇者を貶めることは赦されない」

これも。

「……彼の者が勇ましいモノで在り続ける限りは、でしょ？」

これも。

「よく出来ました。本部からの使者さん」

「当然じゃない。落伍者のアンタと私じゃ出来が違うのよ、出来が」

「嫌味な所は相変わらずだね。観那<sup>みな</sup>」

「アンタこそ変わり映えしない間抜け面ね。独<sup>ひとり</sup>」

「おいおい、久しぶりの再会だ。昔みたいに『おにーちゃん』とは呼んでくれないのかい？」

「死ね」

おっと、残念。

老婆が死んで、男が死んで。

何処とも知れぬ地下室に取り残された僕を発見したのは、男の仲間達だった。

魔法が炸裂した馬鹿でかい音を聞きつけ、慌てて降りてきた彼等が目にしたのは剣と赤ん坊。

魔法使いの少女。

杖を構え、先陣切って降りてきた彼女は泣き崩れた。

聖職者の青年。

悲痛な表情でそんな彼女を支え、宥める。

お姫様。

鉄面皮。無表情。無感情。無感動。

最後の最後で欠けてしまった男 勇者。

残骸すら存在しない。

ハッピーエンドは訪れなかった。

彼等の物語は遺恨を残したまま幕を引かれる。

僕は保護され、剣と一緒に王様の元へ届けられた。

この時の僕の肩書き。魔王に攫われ幽閉されていた可哀想な子供。魔法使いの少女と聖職者の青年は結婚し、夫婦となった。

若き夫婦は「勇者の忘れ形見だ」と僕を引き取ることを申し出て、

無事に受理。

僕も目出度く身元不明の異世界人から、魔王を封じた仲間達の子へと格上げだ。

妹の観那が生まれ兄となり、でも、人生そう上手くいきはしない。義母が教え込もうとした魔法は暴発し何故か僕の体を傷つけた。義父が教え込もうとした魔法は暴発し癒すどころか他人を傷つけた。

何回やっても、全然、全く、成功しない。

誰かが呪いだと言った。

ほら、迫害が始まる。排除が始まる。排斥が始まる。

都合の悪いことに僕は魔王の根城出身だ。

義理の両親は謂れ無き誹謗、中傷から僕を庇おうとしたが、才能が無いのは事実。

最終的には修行の名目で山奥の寂れた教会に放り込まれた。

死物狂いで、血反吐を吐いて。数年間の努力の結果、僕が身に付けられたのは自分を癒す術と少しばかりの武術のみ。何時まで経っても、どれだけ試行錯誤しても他人を治癒することは出来なかった。事件鎮圧要因としての戦闘能力を買われ、なんとか第三種聖職者には踏みとどまっているが、教会内に僕を軽蔑する人間は多い。

妹　観那もその一人。

僕より年下でありながら、既に第一級聖職者の資格持ち。両親譲りの美貌も手伝って内外問わず高い人気を誇っている。

優秀な妹と駄目な兄。

彼女が僕を兄と呼ばなくなったのはいつ頃からだろうか。もう、覚えていない。

「食卓というのは団欒の象徴らしい。

僕と観那は義理でも兄妹だ。

故に、僕等と一緒に朝食を食べる光景は必然、微笑ましいものとなる筈。筈なんだ。

たとえ其処が屋根裏部屋で、出された料理が一人分で、観那の分がないとしても。

「なのに、どうして、こんなにギスギスした空気なんだろうね？」

「黙れ阿呆」

辛辣な物言い。さつきからずっとこの調子だ。

久々に再会した観那は罵詈雑言のレパートリーを拡張し、より高度に、より繊細に、僕を馬鹿にしようとする。昔は馬鹿ぐらいしか知らなかったのに……。

「いったい何処でそんな汚い言葉遣いを覚えたんだい？」

「教会以外に考えられる？」

それは分ってるが言っただけじゃなくなかったな。特に第一級聖職者ママには。

不機嫌な妹を宥めるのは難しい。適当に話題を逸らして意識を別なほうに持っただけこうかな。

「義父さんと義母さんはどうしてる？」

「アンタのこと心配してたわよ。こっちでちゃんとやれてるかって」

「ありがたい話だね」

「ええ、本当にありがたい話よ。親不孝者」

これはかなり重症だね。

いや、まあ、理由はわかってる。

使者が観那だと分った途端に僕の態度が豹変したから。単純明快。ただ、それだけ。

整えかけた頭髮は中途半端に寝癖を残し、手入れをサボった法衣

は皺と穴だらけ。身分が上の客と面会する格好じゃないのは百も承知だ。法衣に関しては、綺麗なのも一着だけ残っているが、一張羅観那相手に着るのは勿体無い。辺境だけに新品は中々支給されないのだ。おまけに買ったら結構高い。

妹相手に媚諂うまで僕も落魄れちゃいない。

「でもさ、観那が来たのは事前に連絡されてた時刻より大分早いんだよ？ 其処も加味してもらえるとありがたいんだけどな」

「だったら、外で待たせるなり何なりしなさいよ」

「僕の生着替えが見たいって？ 変態だなあ、観那は」

「……………」

「もしかして、もしかしくなくても、僕に早く会いたくて急いじやった？」

「いや、それはない」

表情は真剣そのもの。オプションで手を振ってまで全力で否定する。可愛げないな。そんなんじゃ男が寄ってこないぞ。

観那の前で朝食をがつく。

ふむ。こうして真正面からじっくり見ると、観那も中々の美人さんに育ったものだ。

高位の聖職者だけに法衣は豪華絢爛。煌びやかな刺繍と輝く勲章が眩しい。僕の襪襦切れとは雲泥の差だ。ついでに容姿も別格。目鼻立ちが通っているのは勿論の事、艶のある黒髪を馬の尻尾のように纏めていて、それが妙に色っぽい。切れ長の目をしているため、若干キツイ印象があるが本人の性格まんまなので問題なしか。

対する僕は悲しくなるほどの凡人っぷり。むしろ、此方に来る前と全く変わっていない。赤ん坊に戻ったものの、成長後の姿は変動せず。違いといえば、生活環境の変化が原因で、贅肉の代わりに筋肉が付いたことと、傷跡が増えたことぐらい。

世の中って不公平だよな。

最後の一口を食べ終え、そのまま質問に入る。

「それで、なんで僕のところに来たわけ？」

「ちゃんと書類が」

「お偉いさんの書いた、堅つくるしい文章なんて読むつもりはないよ。僕は君に訊いてるんだ」

その方が早いし。時は金なりってね。

「……………」

一瞬視線を泳がせてから沈黙する観那。

こいつの口が重たくなるって事はよっぽどだ。前にはっきり物を言わなかったときは、観那と同年代の野郎からの言伝で、呼ばれた場所に行ったら「俺と付き合ってください」だ。勿論、誠心誠意、懇切丁寧、齟齬がないように、はっきり、きっぱり、お断りした。

厄介事の香りが漂ってきたよ。

「独。魔王が復活した」

思わず歯笛を吹いた。

そうか、ついに、僕の出番が。

「それで？ それだけじゃないんだろう？」

魔王の復活したくらいで態々僕の所に使者が来るなんてありえない。

つまり、定期的に起こる魔王の復活は僕にも何か関係があるのだ。

「実は」

「いよいよ以って異世界人の出番かな？」

僕も十数年間潜伏してきた甲斐があったというものだ。

「アンタが勇者に随行することが決まった」

残念！ 勇者役は別の誰かに掠め取られてしまった。



王宮内部の巨大な広間。

この国の初代国王が建設した、とある儀式専用の場所だ。

何から何まで白大理石で出来たこの空間は今、異様な熱気に包まれている。

広間の中心に敷かれた巨大な魔法陣を取り囲むようにして、王族が貴族が民衆が、その時を待ち侘びていた。

恐れ多くも勇者の旅に参加することとなった僕は最前列、王族の傍で事の推移を眺める。何時もの法衣で出席しようとしたら、ちゃんとした装丁の物を渡された。下級聖職者と言えどもそれなりの格好はしていないと教会の面子が立たないらしい。ご機嫌取りも楽じゃない。

おのぼりさんな僕が、滅多にお目にかかれないような高貴な人々を確り見ておこうと辺りをキョロキョロ見回していると、お姫様と目が合った。軽く会釈してみたが、無視。歯牙にも掛けられないとは、無念。

それにしても、王国屈指の魔法使いが丸丸となつて神代の大魔法を詠唱するのは壮観な眺めだ。どいつもこいつも超一流の腕前。名のある貴族お抱えの魔法使いばかり。僕が知ってる奴なんて

「あ  
いた。」

一団の中で特に小さな女の子。栗色のお下げ髪に質素な といつても周りの連中と比較すればであつて、決して酷い格好ではない

ローブ。他の魔法使い達が一生懸命な中、あの子は何にもしちやいない。呪文は口ばくだし、魔力の放出も確認できない。儂はかなの奴、あんな所で、なにやってんだ。

見つめる僕に気が付いた儂は、一瞬虚を突かれたような顔をして、はにかむ。この御時世、僕に優しくしてくれる子なんて彼女くらい

だ。癒されるなあ。

儂は、自由契約の魔法使いで、僕とはある仕事で一緒に一緒にから  
の仲だ。  
『積もる話もあるし、後で飲みに行こう』

声には出さずにそう伝えようと、儂は満面の笑みを浮かべた。

そして、一転、真剣な表情に戻って、今度は本当に呪文の詠唱を  
開始する。彼女が加わったことで魔法の完成が早まった気がしたの  
は僕の買被りだろうか。

紡がれる一言一言に反応して共鳴して、<勇者の間>が脈動する。  
柱。壁。天井。その全てに刻み付けられた魔法が魔法陣へと力を  
注ぐ。

さあ、儀式が始まるぞ。

異世界から勇者を召喚する際は本人の同意が必要だ。

互いの領地から民を攫うのは自由。

但し、当人が納得していなければ門は開かない。

其れが世界同士の約束事。

呼ばれて、請けて、彼は何を期待して此処に来るのだろうか。

変化か進化か、はたまた退化か。

此処は異世界。死の世界。

期待そのものが間違いだとか何故気がつかない？

大方、勇者になれるって甘言に惑わされたんだ。そうに違いない。

お姫様美人だもんね。

鵜呑みにしなきゃ男が廃るってもんだ。

程度が低い。浅はか過ぎる。思慮の足りない大馬鹿鹿野郎め。

僕は見えたよ先代の死に様。

響きは良いんだ。勇者と正義。悪即斬なんて憧れるじゃない、男  
の子だもの。

だけどさ、だけどだ。

此処は異世界。異の世界。

常識。良識。通用しない。

在るのは冷たい現実だけ。

勇者が正義。笑わせる。

何故縛られる。何故振り解けない。其処がお前の駄目なところ。何時まで経っても引き摺って、何時まで経っても色眼鏡。此方と其方じゃ勝手が違う。

「ほんと、男の子ってのは夢見がちだよな」

「式の最中よ。黙りなさい」

隣の観那と周辺の人々が僕に咎めるような視線を向ける。

そんなにジツと見るなよ。恥ずかしいじゃないか。

「いや、だって結果が見えてる茶番なんて必死に見たって面白くないよ。八百長試合より性質が悪い。観那だって本当はそう思ってるだろ？」

返事はしてくれなかった。ただ刺すような鋭い視線を彼方此方から感じる。

いよいよ儀式も大詰め。

お姫様が観衆の輪から一步踏み出して、異世界人に問う。

「汝勇ましきモノとして破魔の力を振るうと誓うか？」

返答の代わりとばかりに、一際強く魔法陣が輝いた。陣を中心に魔力の籠った風が広間を吹き抜ける。

あーあ。残念ながら儀式は成功だ。

自分から地獄に来るなんて間抜けな奴。

僕とは違って事前にしつかり確認されたじゃないか。

気が付いたときにはもう手遅れがセオリーだったのに。

広間中の人々が王宮そのものを揺るがすような大歓声を上げて、勇者の到来を祝っていた。老婆一人だった僕のと看とは大違いだ。大層なご身分だよな。

ま、初めはこれくらいが丁度良い。知らぬが仏。騙されている内が華だ。

徐々に徐々に、疑念や疑惑が脳髓に浸透し、順々に段々と、真実へと近づいていく。

困っている人々を救いたいという熱望。

唯一無二の特別な存在になりたいという非望。

可愛い女の子に持て囃されたいという欲望。

現状から逃げたいという願望。

人は異世界に自らの望を投影し、異世界は其れを利用する。

究極のギブ・アンド・テイク。

彼の者は異世界に希望を与える。

そして、彼の者に異世界を与えるのは 失望。

おおゆうしゃよ。

しにくるとはなさけない。

閃光が収まり、陣の中心に出現した少年は不安そうな表情を浮かべていた。

もう少し堂々としてよ。此処にいる人たちは、一部を除いて無条件にフィルタが掛かっているから問題ないけど、これじゃあ先が思いやられる。

ま、こついう子だから誘いに乗ったんだろうけどさ。

召喚された勇者は超美形ってこともなく、著しく醜いということもない所謂普通の少年だった。

短髪。中肉中背。押しの弱そうな顔立ち。事実、その辺に転がっていそうな奴である。彼が異世界人だと言っことを証明するのはその服装。パーカーにジーンズなんて格好をしている奴はこの世界にはいない。特にパーカーの素材、ポリエステルは科学の発達していないこの世界には存在しないものだ。

伝説の勇者サマの身分証明がポリエステルとは、ご立派過ぎて笑う他ない。

刻印を残すとか、目の色を変えるとか、もう少し気を利かせてやればいいのに。

どうせ逃げられない籠の鳥に意地悪してどうするってんだ。

広間が大歓声に包まれる中、お姫様が勇者に口付け、隣に立って宣言する。

勇者サマも顔赤くしちゃってまあ。僕ならその子はやめとくけどな。

「今、此処に、勇者の到来を告げるッ！」

さあ、今度は宴が始まる。

これから何日かはお祭り騒ぎだろう。

社交性皆無の僕には辛い日々が始まるよ。

儀式を行った広間がそのままパーティー会場になる、というのは実に効率的で素晴らしい発想だ。

ありとあらゆる職種の人々が入り乱れ、口々に喜びを伝え合う。そんな乱痴気騒ぎ。

才女の観那は各界の大物の下へ引つ張りだこ。

この場に似つかわしくない、異端の僕と逸般人アウトローの儂は騒ぎの中心を離れ、酒を片手に隅のほうで談笑していた。

「いやー、流石ひー君！ 偉大なる勇者サマ召喚の儀式で、あそこまで舐めた態度を取るなんて何処のどいつかと思ったら、やっぱりアంతつすか！」

「儂こそ堂々とサボりなんて、大した度胸だね。一部の奴はきつと気付いてたよ？」

「問題なし！ あの程度の連中にやられる儂様じゃないつす。それに、万が一の時はひー君が身を挺して助けてくれるつすよね？」

「……………」  
「そこで黙るのはどうかと思うつす」  
「いや、だって、ねえ。」

「ああ、惜しいなー。ここでひー君が格好良いこと言ってくれれば、私も落とされることを検討したのに」

「生憎と年下に興味はないよ」

「私とひー君じゃ、そんなに年齢変わらなくないつすか？」

「いいや違うよ。異世界滞在十数年。向こうに居た頃と併せれば僕だって結構な年長者だ。」

「気にすることないさ。儂も結構可愛いんだから、僕なんかで妥協しなくても、適齢期になれば貰い手見つかるつす」

「これでも一応褒めているのに、不満気な様子で儂は溜息を吐く。」

「ひー君。期待はしてなかったけど、その反応はあんまりつす」  
「うわぁ。観那の時同様また不味いパターンだ。」

話題逸らし。話題逸らし。

話の種を探そうと視線を泳がせる内に、大勢の人々 特に女性

に囲まれる勇者が目に入った。使える。

「勇者さんは早くも人気者だね」

「……なんかやけに唐突すね。ま、待望のヒーロー到着だから無理もないっすよ。今回は偶々召喚の間隔が短かったけど、生きてるうちに一代見られれば良い方っすからね」

勇者は客寄せパンダかよ。

「だからといって、これだけ盛大に儀式をするのも変な話じゃないかい？ 別に今すぐ、というか何時まで待たたって、魔王が攻めて来るわけじゃない。故に勇者は庶民の生活とは乖離し過ぎている」  
魔王は人類を蹂躪しようとはしない。むしろ何もしようとはしない。

完全なる無気力、無関心。

ただ在るのみ。

この世界の人々に言わせれば、魔王は存在そのものが害悪らしいのだが、余所者の僕からすれば納得いかない。別に勇者はいらないんじゃないかと思ってしまう。

実際、魔王が復活したからといって、急激に世界が変わるわけではない。

空に暗雲が垂れ込めたり、魔王城が出現したりといった劇的なことは一切起こらなかった。

この広間の鍵が開く時、それが魔王の復活を知らせる唯一の変化。故に、田舎にいた僕は観那が来るまで、気が付きもしなかったのである。

全く、可笑しな話だ。

勇者が正義だと定義されるのは、対極の悪、即ち魔王が居るからだというのに。

「ひー君、この場でそういうことはあんまり言わないほうが良いっす。皆興奮状態にあるから、油断していると酷い目に」

「おい！ てめえ、さっきから聞いてりゃあ言いたい放題じゃねえ

かッ！」

儂の言葉を遮って、僕に罵声を浴びせたのは甲冑に髭面の巨漢。怒りと酒のせいで顔が真っ赤だ。酒臭い息が僕の顔にかかる。

「ほら、やっぱりこうなつたっす」

やれやれ、という風に肩を竦め、儂は僕に責めるような一瞥をくれた。

「仕方ないじゃないか。僕は思ったことは直ぐ口に出すことを信条にしてるんだ。汝嘘を吐くことなかつてね」

「それでも空気は読むべきっす」

「儂、そんな矮小な価値観に捉われていたら人は大きくなれないよ。独立独歩の精神が大切なんだ」

「また屁理屈っすか」

「屁理屈だつて突き詰めていけば理屈とそう変わらないものだよ」

「だつたら、それで其の騎士さんを論破してみるっすよ」

それだけ言うと儂は騒ぎの中に紛れてしまう。

置いてかれたね。完璧に。なんて無責任な奴だ。

儂が行ってしまったても、件の彼の怒りは収まらない。あ、そもそも

も根源が僕なんだから、儂は関係ないか。

「えーっと、じゃあ僕の主張の何処が気に入らないかを端的に述べてくれるかな」

「その糞生意気な面がむかつくんだよ！」

対話不可能。

生まれ持つての顔だから直せないのに。これじゃあ、歩み寄りよ  
うがない。

さて、如何したもんかな。

武器なしじゃ、僕の腕力でこんな筋骨隆々の大男に勝つことは無理。だからといって、大人しくぶちのめされて襤褸雑巾と化すのは却下だ。治るとはいえ、痛いのは嫌だし。

「あろう」

僕が一人で煮詰まっていると、控え目な声がかかった。



ふと、声の主に目をやると、そこにいたのはなんと勇者さま。隣に夢が居る所を見ると彼女が連れて来てくれたのかな。恨み言言った上に脳内で君をボコボコにする予行演習を100回くらいやって悪かったよ。

「その人もきつと悪気があって言ったわけじゃないと思うので、許してあげてくれませんか？」

一斉に僕らの視線が向けられたせいかな、どこか居心地が悪そうにぼそぼそと言う。

いや、悪気どころか悪意しかなかったんだけどね。

それでも、喧嘩相手は収まらないらしく、僕には敵意を勇者には敬意を剥き出しにして反論しようとする。

「しかし、こいつは、勇者様を侮辱して」

「その辺にしておいた方が良いつすよ。まさか、勇者の御言葉に逆らうつもりじゃないつすよね？」

「ぐ……わかったよ」

騎士って奴は権威に弱い。僕を人睨みし、何時の間にか集まってきた野次馬たちを乱暴に押し退け、彼は何処かへ去っていった。一先ず助かったみたいだ。

はあ、それじゃあ僕は、この勇者に取り敢えずのお礼をしなきゃならないよね。一応、危機を救われちゃったし。

舌を噛み切ったのた打ち回りたいくらい、嫌で嫌で仕方がないが、犬に咬まれたと思って諦める他ない。

明日になったら、口内炎が山ほど出来ていそうで怖いよ。

「ありがとう。助かったよ。」

違和感を与えない程度に早口全開で簡潔にあっさりと言いつつ、  
むず痒い。唇が、舌が、口内が、ピリピリした。

最早、一種の精神病。だからお礼なんて言いたくなかったんだ。

「い、いえ。俺なんかでお役に立てたのなら」

勇者は面と向かつてはつきり感謝されたことが照れ臭かったのか、  
赤面しながら、僕とは目を合わせようとせずとせず小声で返した。

ふーん。なるほど、そうか、そういうことね。

彼は　＜必要とされたい＞タイプか。

ま、異世界に取っては最も扱いやすくもあり、最も扱いにくくも  
ある、そんな所だろう。初めのうちはオドオドしていても、確固た  
る自信が出来始めれば、どうなるかはわからない。全てはお姫様の  
手腕次第。お手並み拝見ってね。

でも、その前に

僕としても久々に会った御同輩だ。このまま逃がしてしまうには  
惜しい。機を逸してしまえば、一対一でなど数日は会えなくなるだ  
ろう。少し話してみるのもまた一興かもしれない。

「異世界に来るなんて、君は恐いとか思わなかったの？」

「いえ、少しは恐怖もありました。でも、困っている人を見捨てる  
ことが出来なかったというか、僕なんかで力に成れるならやれるだ  
けやってみようと思ったんです」

周囲の喧騒に掻き消されてしまいそうな弱弱しい声だったけど、  
音量も大したことはなかったけど、彼の言葉には強い意志が感じら  
れた。

僕なんかで、の行に反応して様子を伺っている連中が口々に「な  
んで謙虚なお方だ」だの、「そんなことはない」だの勇者を褒めそ  
やす。

いや、実に感傷的な名場面だね。

気持ちが悪くて吐き気がするよ。

「そいつはまた、御大層な志だね。究極の自己犠牲。それでも僕は聖職者だからさ、そういう姿勢には素直に感服するよ」

「そんなことないですよ」

ああそうだね。勿論、何から何まで嘘だ。

我ながら気色の悪いベタ褒めに、勇者は恥ずかしそうに頭を掻いた。

「魔王討伐、自信の程はどうかかな？」

「これでも少しは腕に覚えがあるので少しは。それにこっちに来てから体が軽いんです。漫画か何かでは、重力が弱いから超人的な力を発揮できるとか解説する場面があったけど、どうやら本当みたいですね」

言い終わってから気が付いたように、漫画なんてわかりませんよね、と付け加える。

いや、よく、知ってるよ。

「呆気無く死んでしまいかもしれないとは、考えなかったのかい？」

「……………」

俯き黙る。

余計なお世話だ、とか、勇者さまが死ぬわけないだろう、とか、周囲で僕への罵声と勇者への声援が入り混じる。

やはり、というか、彼は答えを持ち合わせていなかった。

俺が死ぬわけじゃない！　なんて阿呆な返事が戻ってこなかっただけまだましなのだろう。

イフの話。もしもの話。

もしもあだったら、もしもこうなったら、弱気な人間は未来形の「もしも」を好み、強気な人間は過去形の「もしも」を好む。それは心配性だということ。それは自信家だということ。此度の勇者は確実に前者だ。

そんな彼をしても、自分の死なんて現実離れし過ぎているから考

慮に入れる必要性を感じない。そもそも、問題として設定するにはリアリティーが足りないというわけだ。

確かにそれはそうなのかもしれない。

だけど、それは、考えが甘いと思う。

死が遠いのは君の居た世界での話だろう？

じゃあ、落ち着いて、ゆっくり考えてみるんだ。

此処は何処か？

答え 異世界。本当の意味での正解者は 僕のみ。

人形の代わりに命をボツシユート！ なんちゃって。

「まあ、深く考えることは無いさ。後々、僕の言葉の意味もわかってくる。それに宴の主役を長時間足止めするのは悪いからね。最後に一つだけ。君の名前を覚えてくれるかな？」

「藤間剣ふじまけんです」

外見どおり、やっぱり、日本人だね。お仲間さんだ。

勇者とそれに付随するように、取り巻きがいなくなり、やっと平穏を取り戻した僕の周辺地帯。傍に居るのは僕のみ。話してばかりで喉が渴いているだろうと、水を持ってきてくれた彼女の好意を素直に受け取る。

「なんとかなったつすね」

「なんとかなるもんだね」

「流石にあれはどうかと思うっすよ？」

「あれってなんだい？」

「惚けたって無駄っす。ひー君が勇者嫌いってことは調べがついてるんすから」

調べなくても判り易過ぎる態度だった気がするんだが。

「いや、まあ、ね。僕だって自己犠牲を厭わないってのは高尚な精神だと思うよ。だけどさ、彼は元々いた世界の住人と異なる世界の住人を天秤に掛けて、こっちを取ったんだ。自分の居場所を捨ててね。選択するのはつまりそういうことだろ？ にもかかわらず、本人には大した考えもないみたいだし、僕としては其処に至った彼の

境遇や精神構造に興味があるんだよ」

「またおかしなことを考えるんすね。理由なんてどうだっていいじゃないっすか。勇者は選択の結果此処に来て、事を成す。それで皆が幸せなら、外野がどうこう言う問題じゃないと思っすよ」

「それは確かにそうだけどさ。確固たるものが無いってのはコントロールし易くもあり、し難くもあるものだろ？ 僕の見立てじゃ、彼、きつと化けるよ。それも厄介なほうに」

環境が人を変えるって言葉があるけど、このケースはその最たる例だろう。

異世界。勇者。特権階級。

要素としては十分過ぎる。

「そうっすね。ああいうタイプは一度方向性を誤ったら危険分子でしかないっすから。でも、まあ、そのときはそのときで、秘密裏にきつちり始末するんじゃないっすか？」

「それをやるのは誰の仕事だと思ってるんだい？」

「ひー君や私のように勇者に随行することを義務付けられた人間っすね」

「その通り。仲間なんてのは建前。事実上の監視役なのさ。僕がこんな仕事を請けるなんて意外だけどね。僕はさ、物臭な人間だから、基本的に面倒事は嫌なんだよ。だからああやって辛辣な物言いをする事で勇者に嫌われて、あわよくば担当を外して貰えるかもしれないっつて、淡い期待を抱くのさ」

「それだけじゃない気もするんすけどね」

「それは……まあ、秘密っつて事で」

同じ世界から来た存在なのに、喚ばれ方が違いすぎて嫉妬したなんて言えないだろ？

勇者が<帯剣の儀>を行うまで後二日。

宴は続く。

あるものは喜びに浸り、また、あるものは憎悪に沈む。

肩を組み合ってはしゃぐ者があれば、一触即発の雰囲気醸し出す者もいた。

さなか宛らそれは一つの縮図。

宴は続く。

宴の息遣いが、日常から遊離したその熱気が、等しく人を蝕み、本来の姿から遠ざける。

平素では考えられないような振舞いと、それを不思議に思わぬ観衆。

たひな宛らそれは一つの病理。

そして

有象無象。ありとあらゆる感情を呑み込み宴は終焉を迎える。

< 帯剣の儀 >。

その完遂を以って勇者候補は真の意味で勇ましきモノとなるのだ。

「あー、全力で妨害したいなー」

流石に冗談だけど。

藤間君が喚び出された広間。

その中心に破魔の剣を持ったお姫様と勇者が並び立っていた。

不眠不休で宴に参加していたため、衣服は汚れていたし、彼らの顔色も良くない。

それでも、仕切りなおさず、儀式に入るのにはちゃんと理由がある。

どんな姿をしていようと、姫は姫、勇者は勇者であるという誇示。言うなれば、高貴な見た目ではなく、高潔な中身が彼らをその身分たらしめているのだ、ということ象徴する行いなのである。

僕たち外野はその周囲に円を描く様にして傳かすっていた。

貴族、騎士、平民。

分け隔てなく、様々な身分の人々が皆一様に平伏すのも、また象徴的行いなのだろう。

儀式と言っても、やる事は単純極まりない。

威厳に満ちた長口上もなく、ただお姫様が勇者の方へ剣を差し出す。勇者が同じく無言でそれを頂戴すれば、契約は成立したことになるのである。

外見より内実。

ここまで徹底するとは、腹立たしいほどによく出来た儀式だ。

だが、生憎と不快な見世物を凝視する被虐的趣向は僕にはない。

一切の動が感じられないほど、静謐な空気を利用し、二日分の疲れを癒すため居眠りをする、そう決めた。どうせ儀式に夢中で誰も気付きやしないだろう。

意識が墮ちるまでは一瞬。混濁した思考は瞬く間に霧散し、清涼感すら漂う闇が訪れた。

「君！ ひー君！ さっさと起きるっすよッ！」

なにやら必死な儂の声が鼓膜を揺らす。

朦朧とした意識が急激に覚醒状態へ。

危険が一杯、異世界生活十数年ともなれば堂に入ったものだ。

地面に伏した上体を起こす。パキパキ、関節から音が鳴った。

腰を折り曲げたままの姿勢を長時間維持していたせいで、体の彼方此方が痛い。

辺りを見回せば、あれだけ人が密集していた広間も今は閑散としている。

本来、すぐに片付けをする役割の人間も、お休みを貰っているのだろう。

「なんだよ、儂。僕の安眠を妨げるって事はよっばどのことなんだろうな？」

「ええ、そうよ。アンタが儀式の最中に堂々と寝ていたことに関して問い詰めたけれど、それすら出来ないほどにね」

苛立ちを含んだ、儂ではない女性の声　　「というか観那だ。流石にばれてたか、居眠り。」

「アンタと私と其処の魔法使い、三人を王様がお呼びよ」

「なんでまた？」

僕の問いに呆れたような表情を見せる。

「なんでー、ですって？　ほんつとーに素晴らしい記憶力を持つてるわね。事前に散々言っておいたじゃないッ！勇者の件よ。勇者の件」

「ああ、あれか。なんか事前に面接がどうのこうのってやつ。面倒だから忘れたことにしてたよ」  
殴られた。

広間を出て、観那と儂の後をついて行く。頻繁に王様の住居へ出入り出来るような身分ではない僕は、入り組んだ通路の何処が何処に繋がっているのかさっぱりわからないのだ。

扉を一つ越え、右に曲がり、二つ越え、三つ越え、左に折れ、数え切れないほどの扉を通過した所で、ようやく目的地と思しき部屋の前に来た。

他とは明らかに異なる作り。

一時の学習の成果で、僕とて魔法に関する知識はある。高密度の障壁に覆われているのが見て取れた。中に居る者の許可なく無闇に開けようとすれば、手首から先が無くなりかねないだろう。王様直々にお呼びが掛かったのだから、僕らは大丈夫な筈。

「それで、誰から入るんだい？」

「アンタ以外にいる？」

「ひー君が行くほかないっすよ」

「うわー、虐めだ。数の暴力だ。」

この二人を前にして、逆らうことが出来ない僕は、大人しく扉に



手を掛けの中に入る。

後手に扉を閉め、磨き抜かれた執務机に座る王様と対面した。

今年で四十五歳。食事の良さから成る、恰幅の良い体型。王冠は被っていないが、そんなものが無くとも、ある種の風格とでも言うべきものが備わっている。疲れを窺わせ、やはり眠そうではあったが、その視線は力強かった。

王様に机の前の椅子を勧められ、そこに着席する。

彼はゴホンと咳払いを一つし、話を始めた。

「久し振りだね。君は覚えていないだろうが、こうして一対一で会うのは君が赤ん坊の時以来かな？」

予想していたより、砕けた調子でそう切り出す。

僕は、まだ若い頃の王様に対面したときのことを確り覚えていたが、見に覚えが無いようなふりをした。

「あの時は、本当に吃驚したよ。魔王は封じたが、勇者は死んだという報告。それだけなら珍しくないが、身元不明の赤ん坊が発見された。今まで魔王は人間を攫うなんて真似は唯の一度もしなかった。王国始まって以来の珍事だよ。正直、不吉の前触れじゃないかと肝が冷えた」

僕にとっては不吉以外の何者でもない。

「実はね、君を勇者の護衛に付けると命じたのは私なんだよ」

「そうだったんですか。何処の物好きが僕なんかを推薦したのか疑問に思っていたんですよ」

「迷惑だったかな？」

「いえいえ、とんでもない。身に余る荣誉です」

それは良かった、と微笑む王。人好きのする笑顔だ。

可能性を考えてはいたが、本当に余計なことをしてくれる。

「義理とはいえ君の両親も先代勇者の護衛だったからね。君の両親の推薦もあって、目を掛けていたんだ。君に異論が無いようなら、護衛役として参加して貰うことになるが、いいね？」

「わかりました」

僕の快諾を聞いて再び王は微笑んだ。  
後々正式な連絡が行くから、それまで実家で待機していて欲しいと告げられる。

失礼します、と一礼して部屋を後にした。

廊下に出てみれば、儂が扉に耳を当てていたの丸出しで、観那は「非常識だ」と呟きながら、不快そうにそんな様子を眺めていた。胃が痛くなる光景だ。

喜色満面の儂が僕に声を掛ける。

「ひー君。目を掛けられていたとは良かったつすね」

「嫌がらせかい？ 儂」

「なんでそうなるのよッ!？」

「目立ちたくないからね」

儂がニヤニヤ笑い、観那は当惑した表情で「非常識だ」と呟く。

非常に胃が痛くなる光景だ。

「さ、次は君らの番だよ。順番は好きにしたらいいさ。僕はもう家に帰るからね」

背後で上がる不満の声を無視して、足早にその場を歩き去った。

僕、道わかんないんだよな。

王宮の壁に宮内地図なんて、ないよね。

それにしても、目を掛けていた、か。

彼はどこまで僕のことを知っているのだろうか。

独。肉体年齢十八歳。他人を癒せない聖職者。荒事解決専用の人員。

そして 異世界人。

僕という異端児の悪評 自分を癒す際にのみ発揮される異常な治癒の力 は教会という閉鎖的な狭いコミュニティーの中だけのものだ。

教会は僕という汚点の存在を大っぴらにしたいくないし、僕自身も

目立ちたくない。双方の利益が一致していたのだから当然の帰結だろう。

最高権力者なのだから、この程度調べればわかることではある。実際、彼もご存知に違いない。

なら、何故、僕を推薦したのか？

両親の意見に突き動かされて……は有り得ないだろう。

聖職者枠なら観那がいた。魔法使い枠なら儂がいた。勇者枠なら剣君がいる。

例外的に用意された、僕の役割は何か。

僕に闘うことは求められていない。大抵の事は勇者単独で片が付く。外見の変化こそ無いものの、それほどまでに異世界が正式なルートで訪れた異邦人に与える加護は絶大だ。彼らを前にしては、僕にとっては雲の上の存在である、熟練の戦士すら霞んでしまっただろう。

故に、特殊な技能を持った補助役とお姫様以外のメンバーは同行しないのが原則なのである。足手纏いはいらなくてわけ。

そうでありながら設置された、新たな枠。

僕以外の人間がその枠に該当しない理由は何か。

決まってる。異世界人でないから。それだけだ。

知る筈のないことを、王様自身が知っていたのか、誰かがリークしたのかはまでは分らない。

でも、この人選はそういうことで間違いないだろう。

そして、その目的は

十数年集めに集めた情報と史実から見当は付く。

魔王の討伐。

封印ではない。討伐。二度と復活させないということ。

勇者が魔王を倒すのに至らない原因は力不足ではない。

自分も死ぬからだ。

魔王を封印した勇者は使命を終え、元居た世界に帰ったといわれているが、それだっけと嘘。

異世界人だつて我が身が可愛い。

僕が此方で初めて目にした、一人を除いて一切の目撃者が存在しない、地下室の光景が雄弁に物語っているじゃないか。

だが、僕の仮定では、主原因はそれ以外にも存在する筈だ。

だつてそうだろう？ これだけじゃ、理由としては弱い。事実とするには脆い。脆弱すぎる。

自己を省みない 最早妄執に近いレヴェルで 正義感の強いタイプの勇者だつたらどうなるんだつて反駁に返す言葉が無い。

だから調べた。過去の記録を辿れば、そういう種類の勇者は皆一様に人類に反旗を翻していることが分る。

結果として、ある者は死に。また、ある者は消息不明。

何かがある。確実に、だ。

此度の勇者の道中を観察すればきつとその訳はわかる。

本当は陰から見張る方が良かったのだが、こうなつてしまつては些細な相違だ。

思惑を、陰謀を、誰かの筋書きを許しはしない。

幕を引くのは僕の仕事だ。

人垣となつた数多の勇者。

真相を知っている彼らは、僕を杞憂者だと晒うかもしれない。

だけど、ただどだ、やってみなければわからないだろう。

元の世界に対する郷愁。

元の世界にいるであろう家族や友人に対する恋慕の情。

耐難きは耐えた。

今更何を畏れることがある？

驕つた存在を否定するのは、舞台の外からやって来た僕の仕事だ。

さあ、この傲慢な世界への復讐を始めよう。

.  
. .  
t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 1 - 7 (後書き)

区切りもついたので、初後書きです。

はじめまして……ですよね？

どうにかこうにか、一章、起承転結の「起」と「承」の一部に当たる部分を書き終わりました。

物語が始まるぞって雰囲気皆無なのは、どうなんだろう。

さて、拙作は小説を書く事に関してはずぶの素人である私が、勢いに任せてガガガツと描いたシロモノです。

粗が目立つのは承知の上。

今後の糧として、誤字・脱字の指摘は勿論、厳しくとも、感想や評価など戴ければ、物凄い勢いではしゃぎます。

それでは「次章も宜しくお願いします」と挨拶もそこそこに後書きを締めたいと思います。

ここまで読んでくださった方、本当に有難う御座いました。

青色眼鏡

## 2・ジタイハスイイスル

嘘を吐くのは案外容易だ。

一点の曇りも無い目で、絶対の自信と共に、淀み無く雄弁に語ればいい。

それだけで愚か者はコロツと騙される。

もし、少し利口な相手が頭上に疑問符を浮かべる様な事があれば、また畳み掛けるように嘘を重ねていけばいい。一層、二層、三層、と段々分厚くなっていく嘘。矛盾が生じた際は、それをこれまた嘘で覆い隠せば済む話。

自分が相手より多くの情報を持っていて頭が切れさえすれば、少なくともその場じゃ誤魔化しきれぬ。

だから、万人にとってそうであるように、僕にとっても嘘を見破れというのは正直結構な難題に相当し、それ故に今置かれている状況を上手に分析することは殊更困難なことなのだ。

ふむ、一体何をどう取り繕ったら、勇者の初仕事と同じ『人間の悪党退治』などというものになってしまうのだろうか。甚だ疑問である。

勇者御一行に王様が命じたのは、

辺境で好き勝手やっている連中をとっちめてこい。

なんて、僕でも、というか僕が今迄教会の仕事でやっていたような使命だった。

僕としては、「至急、魔王の根城に突貫。これを殲滅せよ。敗走は許さん」とかそんな感じの、所謂イカニモな命令を期待していただけに興ざめだ。勇者の犯罪抑止力としての効果がどれ程のものなのかは、完全にデータ不足で未知数だが、この扱いには疑問を覚えざるを得ない。

だってほら、勇者ってのは魔物討伐のために存在する、人類の最終兵器にして希望の星なのである。

魔物やそれを率いる魔王という人外討伐の為に勇者を呼ぶのが本来で本質だ。同じ人間の同胞　同族にあだなす犯罪者をそう呼んでいいのには疑問だが　を駆逐する為に勇者を用いるのは何か違わないだろうか。

例えるならそう、僕のようなオツムの足りない落ちこぼれの底辺聖職者がでーんと執務机に座って、観那のような成績優秀将来有望株を顎で扱き使う、みたいな違和感。適材適所とは言い難い。

確かに勇者の力は強大だ。平和な日本に住んでた藤間君だって、此方に来ればそれだけで最強の戦士の仲間入り。ゲームで例えれば、初めから全ステータスカンスト状態みたいなもん。強くてニューゲーム。うわー、マジで反則くせえ。

だから、彼の手に掛ればならず者なんて何の障害にもならないだろう。僕ら随行の人間は一切手を貸さなくなつて良い。遙か後方の安全地帯から、そのチートっぷりを眺めてさえいれば、それだけで万事が円満に解決する。武力を行使するという意味では、この人事は適切と言えないことはない。

だけど、勇者である藤間君本人は異世界初心者なのである。要するに、この世の中の事を何一つ知らない赤子も同然だ。

餓鬼の喧嘩じゃないんだから、圧倒的な力で相手をぶちのめせば、それで全部御仕舞というわけにはいかない。さっきの比喻をまた持ち出すなら、ゲームみたいに壺を割りつつ山賊退治をして宝箱を漁り「ハイ、サヨウナラ」ってな具合に単純ではないのである。

戦略面は、まあ不安要素を差引いたとしてもなんとかならないことはないだろう。しつこいようだが、それだけ勇者ってのは強い。

問題なのは、政略面や精神面だろう。

治安を守るのは騎士達の仕事である。余所に所属する人間がわざわざ参加することはない。互いの領分は基本的には不可侵だ。だから、僕のような下級の聖職者は其処に消耗品として参加させてもら



う。魔法使いだつて一応の敬意は払われるが、立場は似たようなものだ。騎士は自分達の仕事と伴う責任に誇りを持っているのである。其処に勇者が参戦というのはどうなんだろうか？

宴の際の騎士の態度を見る限りじゃあ、間違いなく勇者は彼等にとつて尊敬の対象だが、その仕事を取られてしまつてはどうなるかわからない。縄張り意識つてのは厄介なものだ。

そして、それ以前に、藤間君に人を殺せるかつて問題がある。

此処は平和な日本じゃない。日常的に人が死ぬ。人間一人分の命が割りと軽い。でも、異世界人の彼にそれが理解出来ているとは思えないのである。

いざつてときに躊躇いなく出来るか、否か。

僕の見立てじゃ間違いなく不可能だ。彼に自分と同じ人の姿をしている存在を殺すことは出来ない。それどころか、きつと自分の目の前で人が死ぬのすら良しとはしないだろう。彼は確実にそういう人間だ。常識人過ぎる。だから、面倒。

向こうでの常識なんて、こっちじゃゴミ同然の非常識だということにそれを理解出来ない。

魔物や魔王退治ならそれでも務まるが、十中八九血生臭いことになるであろう本件にそれはそぐわない。

あー、ほんと暗雲垂れこみ過ぎだと思ふんだ。きつとこの任務は碌なことにならない。

僕の杞憂で終われば万々歳何だが、きつとそうもいかないのだろう。

王都を発つて数日、早くも僕の頭と胃は神経質な痛みを訴え始めていた。

陽光を遮るものなど一切無いだつた広い街道。燦々と降り注ぐ光が僕の頭痛を助長させる。酷い状況には慣れているが、何度経験し

ても嫌なものは嫌だ。糞暑い今日に限って、無風なのが更に辛い。

勇者。お姫様。魔法使い。聖職者。おまけの僕。

五人という史上最多数の勇者様御一行は、王都から延々と伸びている街道を歩いて辺境へと向かっていた。馬を使えないのは、勇者は徒歩で移動しなければならぬという原則があるから。当然の如く、御供まで巻き添えである。

先日の宴のような豪華な装いは誰もしておらず、全員が質素な軽装である。僕と儂は元々大して飾り気のあるほうではないので、これが普段着みたいなもの。普段から身なりに気を使っている、若しくは使わなければならぬ、観那や姫様も各々かなり抑え気味の恰好である。

……あ、藤間君は相変わらずパーカとジーンズだ。元々着ていた服が勇者の旅装束。喚ばれたときに入浴中で全裸だったら、一体どうするのだろうかという考えでしまう。元の世界じゃ、赤いワンピースが眩しい車が来るような出で立ちで、往來を闊歩させるのだろうか。

「さつきから一人でコロコロ表情を変えて忙しいっすね？」

隣を歩く儂が不思議そうに僕を見る。

「只でさえ間抜け顔なんだから、これ以上に締まりの無い顔してどうすんのよ？ バカ」

前を歩く観那が鬱陶しそうに振り返り、僕を見て言う。

「ん？ いや、藤間君が全裸で歩き回る姿を想像したらついにやけてしまっただけだよ」

隠すようなことではないので正直に言ったが、彼女等の反応は芳しくない。

「ひー君にそういう趣味が……」なにやら深刻そうに顔を伏せる儂。「うつわ、最低」心底嫌そうに吐き捨て、もうこちらを見向きもしない観那。

なんか僕は不味いことを言っただろうか。これから勇者の服装に關して徹底討論が始まってもおかしくないくらいに、重大な疑問だ

と思うんだが……。

これから結構長いこと一緒なのに、僕ら三人の間には未だ円滑な会話がない。ちゃらんぼらんぼと生真面目な観那の組み合わせで上手く回るわけがないし、其処に口下手な僕が加わったのでは尚更だ。

その点前の二人は、

「へえ、そんなことまで。姫様は本当に凄いですね」

「ば、莫迦もの。王族ならこのくらい当たり前じゃ！」

「それでも凄いですよ。俺じゃ考えられないです」

「そ、そんなに褒めるでないっ！」

……なんだろうね、この微笑ましい光景。

素直に褒められたことが余程嬉しいのか、顔を真っ赤にして表面上は怒りつつも、もっと言って欲しそうな姫様。大人びてはいるが、その辺はまだ年相応。十四歳の感覚らしい。

腰の辺りまで伸びた、軽くウェーブのかかった煌びやかな金髪と精巧に作られた人形のように整った顔立ち。姫様ほどの絶世の美人は國中探したつていないとの評判である。

姫様に観那、儂だつてちよつと幼い印象があるが可愛らしい容姿をしている。噂じゃ歴代勇者もそうだったらしいが、どうも彼等の周りには綺麗所ばかりが集まるようだ。眼福眼福。勿論僕は平々凡々だが、それは当たり前。男が格好良くて喜ぶ勇者サマなんて勘弁してほしい。

そんなわけで、ついつい、姫様と乳繰り合つてる藤間君がちよつと羨ましいなんて思ってしまった自分に自己嫌悪。

全く、前途多難である。

## 2・ジタイハスイスル（後書き）

お久しぶりですみません。

大幅なんてレヴェルじゃないほどの時間がかかってどうにか二章突入です。……そもそも、覚えてる方がいるのでしょうか？

牛歩で時折停滞しそうですが、見守って下さる方がいれば嬉しい限りです。

青色眼鏡

一日の終わりを迎える場所が、必ずしも暖かなベットのの上であるとは限らない。道中にある宿の位置は予め決まっているのだから、そこまで歩くことが出来なかったときは、野宿をせざるを得ないのである。勇者御一行様に路銀が充分あったとしても、肝心の宿泊施設がなければ話にならないというわけ。

といっても、普通はそういうことが起こらないよう、上手い具合に宿が置かれているものだ。僕等が利用している街道が、王都と辺境を結ぶ唯一の整った道ともなれば尚更だろう。仮に、僅かな空白があったとしても、「そこに宿を作る」利用者独り占め」の法則でまず放っておく奴がいない。……よっぽど治安が悪かったり、強力な魔物が徘徊していたりしない限りは。

故に、問題があるのは僕等の側。

要するに、移動手段が徒歩であることが駄目なのである。

通常の旅では馬を使っているのだから、街道の規格はそれに合わせて作られている。隙間なく置かれている筈の宿の配置は、あくまで一日に移動出来る距離を馬基準で算出したものだ。だから、徒歩の僕等には当て嵌まらない。

人間と馬の移動能力の差は歴然。

どうしても屋根の下で眠れるのは数日おきになってしまう。

宿に泊まれない日は、外で寝る他ない。

つまり、野宿だ。

野宿には危険が付いて回る。

無防備な寝込みを襲われたら、どんなに屈強な騎士とて易々殺されてしまう。だから、監視の目を絶やすことは出来ないのだ。常に誰かが起きていて、周囲に目を配っていなければならぬ。

僕等が向かうのは辺境。つまり、僻地。

王都から離れれば離れるほど治安は悪くなる。それだけ危険も増

えていく為、見張りの必要性はどんどん上がる。

こんなことは馬鹿でもわかる。

むしろ、わからなければそいつが馬鹿だ。

だというのに

思わず嘆息する。

近くから上がる静かな寝息。

暖かな焚火を囲むように輪になっている一行。

毛布に包まって、ぐっすり眠っているのが三人。

目の下に隅を拵え、濁った瞳でぼうつと揺らめく炎を見つめるのが二人。

前者が姫様、観那、藤間君。後者が僕、儂だ。

満天の星空の下、寝ずの番をしている真つ最中である。

「なあ、儂」

「はい、ひー君」

「なんで起きてるのが僕らだけなんだ？」

「今更、それを訊くんすか？」

草臥れた様子の儂。

時折、首がかっくりかっくり揺れる様から、相当眠いのが伝わっ

てくる。一日中歩いた後で見張りだ。無理もない。斯く言う僕も、

遠くなっていく意識を繋ぎ止めるのに必死だった。

「人から言われて漸く認める気になることもあるのさ」

「そうっすね。……もう三日？」

「だね。三日、殆ど寝てない計算になる。僕らもそろそろ限界だよ」

頭数が二人では、ヘヴィー・ローテーションにせざるを得ない。

分母が少ない以上、一人一人にかかる負担はどうしたって重くなってしまう。

本来なら五人いる筈の一行で、きちんと見張りが出るのは僕ら

二人だけだったのである。その必要性を理解していても、実行出来るかどうかは別問題なのだ。

「ま。見張りつてのは、ただ起きていればいいものでもないっすからね」

儂が半ば諦めたように呟く。僕も思わず溜息。

見張りの意図は言わずもがな。

夜襲をさせないことである。

その為には、真つ暗闇の中から、ほぼ完全に気配を殺して近づいてくる不届き者を見つけ出さなければならぬ。これがネックだった。

例えば、魔力の扱いに長けた魔法使いと聖職者は、四方に自身の魔力を散布することでかなりの精度を持った警戒網を張ることが出来る。

例えば、鍛えられた五感を持つ戦士は、微かな足音や、空気の乱れから、気配を察知することが出来る。

では、ここにいる面子はどうか。

まず、藤間君。

如何に勇者とて、圧倒的な経験不足を補填することは出来ない。見つけ出さなければならぬ対象を知らないんじゃ、どうしようもない。

「探し物をしまーす。でもそれが何かわからないでーす」 馬鹿丸出した。

また、僕の私的な感情として、彼に自分の命を預けたくなかったというのも大きい。

信用出来ない。

信用しようという気にもならない。

だから、彼は没。

次に観那。

こいつは筋金入りの箱入り娘である。

出来ない僕とは違って、我が妹は優秀だ。異例の速さでエリートコースを駆け上る観那が、こんな下っ端の仕事を経験している筈がない。

今から魔力による探査を手解きしても構わないが、正直この技は勘による所も大きい。藤間君同様に探す対象がわからないんじゃない話にならないのである。

よって、観那も没。

最期に姫様は……当然無理。没だ。

箱入りどころか、金庫入りだった彼女にそんな芸当は不可能だ。

そもそも、上流階級の間人がこんな旅をしていること自体が間違いだと僕は思う。

足手纏い。

そう、はつきり言ってしまうえば、彼女は足手纏いだ。

その存在が一行に害をなすことはあれども、益をなすことは殆どないと言っても過言ではない。

なのに、勇者にはお姫様が同行するのが常。

おかしな話だ。

実に可笑しい。

そうやって引き算を行った結果、どうにか残ったのが僕と儂であった。

たまたま次の宿が遠かった為、この三日は、時折二人の間で交代を挟みつつも、寝ずの番を繰り返しているというわけ。

回復魔法やら、儂秘蔵の怪しげな薬物やらで、どうにかこうにか保たせてはいるが、正直辛かった。おそらく明日は屋根の下で眠れるだろうが、こんなことを何度も何度もやれるわけがないのは明白だ。

さて、どうしたもんか……。



誰かに責任があるなら話は簡単なんだけど、これはそういふ類の問題じゃない。原因は、経験不足やふざけた勇者関連の決まり事の様な、どうしようもないことなのだ。

ああ、面倒臭い。

「ひー君」

思案に耽ろうとした僕に儂がストップを掛ける。

表情は真剣。

同時に、僕の方でもそれを感じ取った。

此処から十数メートル後方。

何者かが動き回る気配。

散布した魔力は勿論、空気の乱れや僅かに鳴る足音が、僕にそれを伝える。

鋭敏になって行く感覚と昂って行く感情。

これは、そう、間違いなく

「敵っす」

そう、敵だ。

忍び寄る気配は三つ。

悟られないようにと頑張っているのは窺えるが、正直拙い。

殺しきれない呼気。

一帯に漂った臭気。

草や枝を踏む足音。

此方へ向けた殺気。

どれもこれもバレバレだ。

聞かれているのを承知で、俺と会話をする。

「皆を起こすすつか？」

「いや、寝かせたままで構わないよ。どうせ雑魚だ。僕一人で十分。俺はここで留守番ね」

僕の言葉に苛立ったのか、連中の怒気が空気を介して伝わってくる。

堪え性が無いな。だから駄目なんだよ。やはり、大した相手じゃない。

僕だつて伊達に異世界で18年生き残ってきたわけじゃない。そこまで強いわけではないが、年季相応の力は備えているつもりだ。この距離で気配を悟られているような奴等に負けるつもりは毛頭なかった。

それに、

勇者や姫様にぎゃあぎゃあ喚かれても面倒だ。効率を重視するなら、こつそりと秘密裏に片付けてしまった方が良い。

見敵必殺は基本中の基本。

泳がせて様子をみようとか、特別な意図がなければ、さっさと始末しておくに越したことはない。少なくともこの18年、僕はそうやって生きてきたし、そうしなければ生き残れなかっただろう。

「それじゃあ、此処は頼んだよ」

夢の返事は待たず、下半身に魔力を集中。

次の瞬間には、狙いを定め、地を蹴り跳躍する。

月明かりしか光源が無い辺りは相応に暗い。明るい焚火の傍にいた僕の眼は慣れるまで役に立たないだろう。張り巡らせた魔力と、鍛えた直感を頼りに跳んだ。

一回。二回。三回。

それで、距離は零になる。

おそらくこいつ等は、魔力の何たるかも理解していない様な人種だろう。

だから、十数メートル程度の距離で自分達は安全だと錯覚を起す。

本当に、御目出度い頭だ。

目の前には驚きを顔面に張り付けた、汚い身形の男が三人。

やつれてはいるが、全員体格は良い。仕事を頸になり、路頭に迷った元労働者つて所かな。困りに困って犯罪に手を染めちゃいました、みたいな。

全員剣を構えてはいるが、武器を持ったところで素人は素人だ。

何ら脅威にはならない。死んでしまえ。

三人組の一人に悠々と歩み寄るが、彼等は動かない。動けない。

瞳にはきちんと僕の姿が映っているのだろうが、それを解する余裕がない。脳髄は氾濫する恐怖を処理し切れず、結果、身動きが取れなくなる。彼等に出来るのは、引き攣った表情で、僕を見つめることのみ。

わかるなあ。その気持ち。

でも、同情はしない。

魔力で強化した拳を顔面に叩き込む。

ぐしゃり、とそんな間抜けな音を立てて、呆気無く男の頭部は爆散した。

一人目、死亡。

漸く事態を把握したのか、凍っていた他の二人が動き出す。

片方は奇声を上げながら、僕に斬り掛った。

太刀筋は愚直で粗雑。我武者羅にただ振り下ろしただけ。火事場の馬鹿力を發揮しているのか、素人にしては速い動きだ。だけど、それでも、結局、無駄。

遅い遅い遅い。実に、遅い。緩慢過ぎて蠅が留まる。死に物狂いなだけじゃあ圧倒的な力の差は埋められない。残念でした。

軽々避けて、心臓を抉る。

二人目、死亡。

最後に残った奴は、一人目が死んだ時点でさっさと逃げ出した。

場合が場合なら正解。でも今回は不正解。

僕はそんなに甘くはないぞ。

難なく追いつき、背後から足払いを掛ける。

男の両脛が耳障りな音を立てて、あらぬ方向に曲がった。とはいえず、それだけで今まで走っていた分の運動エネルギーを殺しきることはできず、男は顔面から前のめりに倒れ込む。うわ、痛そう。

同時に、彼の口からくぐもった悲鳴が漏れる。おっと危ない。あまり騒がしくされると、残してきた三人が起きてしまうじゃないか。慌てて、倒れたその背中に押し掛かり、後ろから頭頂部と顎掴んで抑え込む。血と汗と涙でぬるぬると滑るせいか、力加減を誤って歯を数本砕いてしまった。ま、話をさせるのに支障はあるまい。

そう、僕は話をしたかった。

「さて、と。余計なことを喋ったら即座に殺す。……いいね？」

男の耳元で囁き、彼が頭を上下に振ろうとするのを両腕越しに感じ取ってから、顎部の拘束を解いた。これでよし。

「それじゃあ、えーっと……何でこんなことをしたのかお聞かせ願えるかな？」

男は折れた歯を血と共にペツと吐き出し、

「や、雇われたんだ！ 職を失って、酒場で飲んだくれていた時に声を掛けてきた奴がいて、あんた等を殺せば金をやるって……。頼むから、殺さないでくれッ！」

涙ながらにそう懇願した。

ふーん。雇われた、ね。

「誰に雇われたんだい？」

「知らないんだ！　そ、そいつは、そもそも名乗らなかつたし、山高帽を目深に被っていたせいで顔がよく見えなかつた。ただ、前金として結構な金額をその場でくれた。だから、乗ったんだよ。ほ、本当にそれだけなんだッ！」

山高帽ってことは魔法使い？　いや、安直過ぎるか。

何にせよ、僕等の邪魔をしたい奴がいて、この旅の目的を知っているであろうことは間違いなさそうだ。普通に考えるなら、依頼人はこれから潰しに行く連中なんだが、第三者の可能性も否定出来ない。早くも面倒臭えよちくしょう。

「な、なあ、あんた聖職者だろ！？」

そんなことを考えていて、注意が逸れた。緩んだ頭部の拘束を振り解き、男が必死の形相を此方へ向ける。涙と血でぐしゃぐしゃになった顔だった。

「いかにも。確かにそうだね」

「だったら、助けてく」

そこから先は言葉にならなかつた。いや、させなかつた。

情報は引き出した。

つまり、こいつは、もう用済み。

頭部を掴んで、思いつきり地面に叩き付ける。ただそれだけの行為で、彼の頭は柘榴のように砕け散った。

三人目、死亡。

「あー、残念。僕は先輩からも後輩からも、聖職者失格の烙印押されちゃってるからね。哀れな哀れな子羊君に憐憫を垂れてやる気なんて、さらさら無いんだなー、これが」

ちくりと僕の胸を刺すのは、それでも僅かに残った罪悪感。

まあ、その、なんだ。

来世なんてあるのかどうか知らないけれど、次はもっと楽に死ね

53

## 2 - 3 (後書き)

まさかの連続更新。

一番驚いているのは、他ならぬ自分でしよう。

さてさて。

今回はちよつと残酷描写多目な回です。

一応、次回もそんな感じになりそうなので、苦手な方すみません。

青色眼鏡

消えて欲しい。

死んで欲しい。

そして、僕は帰りたい。

頭骨を砕き、脳髓を砕き、それで頭部が砕けた。首無しになって

一人が死んだ。

筋肉を貫き、肋骨を貫き、それで胸が貫かれた。串刺しになって

一人が死んだ。

頸椎が潰れ、顔面が潰れ、それで顔が陥没した。挽き肉になって

一人が死んだ。

どれもこれも僕がやったこと。

一人目は認識が追い付かないまま殺された。

二人目は立ち向かったが力及ばず殺された。

三人目は痛めつけられた拳げ句に殺された。

どいつもこいつも僕が殺した。

戸惑うわけがない。躊躇うわけがない。日和るわけがない。

そんな余裕はない。そんな余地はない。そんな猶予はない。

僕には度胸がない。僕には勇気がない。僕には覚悟がない。

何処の誰でも殺せなければ死んでしまう。

だから出来た。だからやった。

必要悪だから。必然悪だから。

手段は二の次。結果が最優先だ。

道を選べるのは強者の特権。

道を選べないのは弱者の力。

僕は弱者だ。選ばない。

死にたくないから誰かを殺せる。

死にたくないから自分を殺せない。



死にたくないから誰かを救せない。

死にたくないから自分を救せる。

手前勝手。自分勝手。自由勝手。

何もかもが間違っている。

だけど、

何もかもが噛み合っている。

消せばいい。

殺せばいい。

それでも、僕は帰れない。

殺人現場に漂うのは、当然濃密な金属臭。

血で死を洗うことは出来ない。

つい先程まで男達が放っていた臭いは、転がる肉塊が放つ死臭によつて塗り潰されていた。幸いにも今日は風の無い日らしい。日中はうんざりしたが、御蔭で助かった。

「あつちやあ……。ちよつと調子に乗り過ぎたかな」

全身にべつとりと塗りと塗りたくられた、まだ生暖かい返り血と脳漿。

それは、しつこく纏わりつく人殺しの証にして生命の残り香。後先を考えずに暴走した代償とも言つ。

実際、困つた。

真つ赤な格好のままに残してきた三人の前に行けば、僕の人殺しが発覚してしまう。全身赤く染まっているからといって、「季節外れのサンタクロースだよー」なんて言い訳はまず通用しないだろう。いや、そもそも此処にはそんな概念が無いか。

兎に角僕は、とつ散らかった一帯を始末する術を考えなければならぬ。ふむ、暗い中で思案。正に暗中模索である。ちよつと上手いこといったかな？

どうしたもんか、と考えたところで、

「ひー君、もう終わったつすか　　って臭！」

事が済んだことを悟った儂が、お下げを揺らして此方へ駆け寄つて来る。

途中までは僕を労う柔らかな表情だったが、血の臭いを嗅いだ為か即座に顰め面に変った。やっぱりぶちまけ過ぎちゃったかな。反省反省。

なんにせよ。

「ちようど良い所で来たね。さあ、片付けを手伝ってくれ」

「ず、随分いきなりつすね」

儂はキヨロキヨロと辺り一帯を見回し、ガツクリと頂垂れた。ああ、僕も君の気持ちは痛いほどよくわかるよ。なんでこんなことになつちやっただらうね。不思議で仕方がないや。

「聖職者どころか人間としても落第なのは昔から知ってたけど、流石にこれは拙いつすよ。皆が起きたら大顰蹙びんせきくは免れない。そもそも、なんでこんな馬鹿なことをやらかしたんすか？」

「えー、なんでだらうね。僕が起きてるのにユウシヤサマが寝てることとか、僕が君と観那の間で苦労してるのにユウシヤサマが姫様と楽しそうなこととか、ユウシヤサマと四六時中一緒にいなきゃならないこととかが関係しているのかもしれないや。あ、誤解を招くといけないから補足すると、別に藤間君を悪く言うつもりはないよ？」

「どう考えても恨み節つすよ？」

「いやいや、悪いのは勇者であつて藤間君じゃないさ」

「同じことつすよね、それ」

「違うよ。全然違う。さつきも言ったけど、僕が嫌いなのは勇者だ。藤間君一人には、寧ろ何の関心も感慨も抱いちゃいない」

「勇者が剣さんなら同じことじゃないつすか？　勇者が嫌いなひー君は、勇者である剣さんも嫌いだつてことになる筈」

「んー、本当にそうかな？　例えば、藤間君が志半ばで死んでしま

つたとする。そのとき僕は、使命を全う出来なかった勇者を足蹴にした上で指差して嘲笑いつつ、藤間君が死んだことを嘆く……まではいかなくともちよつと残念くらいには思うだろう。つまり、僕は勇者が嫌いだけど、藤間君個人に対しては特別な感情を抱いちゃいない。どうかかな？」

儂は腕を組んでちよつと唸った後、こちらをビシッと指差して、「詭弁つすね。実際に勇者なのは剣さんだから、結局ひー君が嫌いな人物は彼と言うことになるっす。今の話はひー君が勇者を嫌っていることの証明にはなっても、剣さん本人を嫌悪していないことの論拠とはならないっすよ」

「ま、その通りだろうね」

反論しようがないから、僕は素直に認める。

儂はちよつと得意げに胸を反らした。……やっぱり無えな、こいつ。

「なににせよ。ひー君の勇者嫌いは筋金入りっすね」と付け加え、儂は苦笑した。

僕は肩を竦めてみせる他ない。

そんな僕を見て、何が可笑しいのか儂はまた笑った。

「全く、仕方ないっすね。それじゃあ、ひー君に機嫌を直してもらう為にも、ちゃっっちゃと片付けしちやいましょうか」

そう言って呪文を詠唱し始める。

儂の唇が言葉を紡ぎ、呼応するように彼女の魔力が螺旋を描く。

一切の歪さが排除され、最適化された軌道は驚くほどに流麗。

周る。

方向を指定し、

回る。

総量を調整し、

廻れ。

魔の法を成す。

散乱した血肉は灰に。

散乱した死臭は風に。

僕じゃ到底及ばない領域の技。

それを僕は、何でもないことのようにやってのけた。

これが性能の違い。これが才能の違い。

決定的で致命的で覆らない絶対的な差。

やっぱり、僕は、弱い。

## 2 - 4 (後書き)

気が付けば、そろそろ30000字突破。その割に大して巧くなっていないような気が……。

青色眼鏡

一般人ボコつて調子に乗ってたら、自分より遙かに強い奴にへこまされた。というのが、つい昨日の夜、我が身に降りかかった出来事である。実に格好悪い。

誰が悪いかって、勿論、勇者が悪いんだが、僕はこの苛立ちを直接本人にぶつけるわけにはいかないから困ったものである。だからこそ、これまでの道中僕は多大なストレスを溜め込む羽目になったわけだし、だからこそ、昨夜のような行為に走った。おお、ひつでえ悪循環。兎にも角にも、勇者という精神不安定剤のお陰で、僕の心はすっかり荒みきっていたのであった。

「ひー君」

「なんだい、儂」

「いつになったら次の宿に着くつすか？」

「宿どころか目的地が間近の筈なんだけどね」

「ひー君」

「なんだい、儂」

「魔法つて全然使えないつすね」

「そんなもんさ」

「ひー君」

「なんだい、儂」

「目が死んでるつすよ」

「君だつて同じだろう」

「ひー君」

「なんだい、儂」

「朝日が眩しいつすね」

「そうだね。眩しいや」

眠らないように眠らないように。とずるずる会話を続けて、ようやく朝日が昇る時刻となった。濁った僕等の瞳に容赦無く陽光が射

し込む。頬を熱いものが伝うのは、現状への嘆きなどではなく、ただ眩しいからだと言いついた。言い聞かせないとやってられない。昨晚思いつきりはしゃいだ後始末で体力を消費し、僕も僕も体力が底を尽きかけていた。

全身にこびり付いた体液を落とし、服を着替え、何事もなかったことを演出する。

言葉にすればそれだけだが、これが案外大変なのである。

徹夜生活四日目。

ぶっちゃけなくてもそろそろ限界だ。

「とか深刻に考えていたのがつい数時間前のことだとは思えないよなー、ほんと」

目の前に出来た黒山の人だかりをボーッと眺めつつ、一人ごちた。ゆづに百を超えるであろう人間が勇者様とお姫様を取り囲んで、きゃーきゃーと騒いでいる。五人編成の勇者様御一行だけじゃ、どう頑張っても生まれぬ光景。

ということは、ということは、だ。

現在地〃目的地。

信仰心なぞ欠片も持ち合わせていない僕だが、今回ばかりは現代人の癖でつい天に感謝してしまった。そのくらい嬉しかった。

神様、ありがとうございます。ついでに、僕を元の世界に還してその勢いで死んでくれ。

「独」

観那が咎めるように僕の名前を呼んだ。

「あんた、なに考えてる？」

あれ、罰当たりなモノローグを読まれたかな。

「これで温かい布団で眠れる」

脛を蹴られた。痛い。

「そんなことを訊いてんじゃないわよ、バカ！ 私が言いたいのは、この街が平和過ぎないかってこと」

「平和が一番だよ」

「ええ、そうね。でも、だったらなんで王様は私達を此処に送り込んだのよ？」

権力者の気紛れって答が正解なら幸せなんだけど、そもいかないのが現実だ。

生まれてから何度目になるかわからない溜息を吐いた。そろそろ仕草が堂に入ってきた気がする。嬉しくないけど。

ようやく辿り着いた目的地は、辺境にあるにしては随分と規模が大きかった。村というより街と形容した方が良さそうな大きさである。こういうときこそ、現代人らしく東京ドーム何杯分って単位を使おうかと思っただが、そもそも僕は東京ドームの大きさを覚えていないことに気が付いた。残念。

ちよつと脇道にそれたが、要するにでかいのである。不自然なほどに。

この地域が何故放置されたのかといえ、それは魅力がないからだ。農産物が豊かに採れるわけでもなく、鉱物等の資源が潤沢なわけでもない。おまけに位置は王都から遠く離れている。つまり、将来性が見込めなかった。だから、無視された。

しかし。

今、ここには街がある。

王都との交流もなしに、独力でここまで発展出来るとは考えられない。この異常な成長には、必ず「誰か」が関与している。そして、その「誰か」はほぼ間違いなく、昨晚の襲撃者を送り込んだ連中だろう。



隠さなければならぬような、後ろ暗い「何か」がある。

僕らがこの地で為さなければならぬことは、その「何か」を暴き、「誰か」を始末することである。

で。観那が疑問に思ったのは、それにしても街に活気が有り過ぎないかって事だろう。

僕も街に入つてすぐに歓待を受けたことに不自然さを感じてはいた。本当に平和なら勇者を送り込む必要はない。査察だけなら、適当な人間を数人送れば十分なのである。

勇者を起用するということは、武力を奮わなければ解決が困難だということだ。なのに、この街にはその相手がいる気配がしない。

明らかな不審。その陰に敵がいる。

観那はそう言いたいんだろう。

僕もそう結論して終わりにしたいんだが、どうにも納得がいかない部分があった。

昨晚の襲撃者のことが引つ掛かっていた。

普通な思考の流れをすれば、「何か」が露見するのを防ぐために僕らを亡き者にしようと思論んだことになるのだが、これではどうもおかしい。

消そうとした相手は只の人間ではなく 勇者だ。

勇者の圧倒的戦闘能力は周知の事実だ。誰をけしかけたところで、ほぼ百パーセント返り討ちに遭うことなど子供でもわかる。昨日僕が殺した連中は、僕らが勇者様御一行だと教えられていなかったに違いない。でなければ、いくら金に困っていたからといって、こんな無謀な話に乗る筈がないのである。

万に一つでも成功の可能性があるとすれば闇討ちだが、素人集団を利用した時点で、それに賭けていたとは考えられない。

つまり、絶対に失敗する襲撃を敢えて行ったことになる。

それは自分達の存在をわざわざ僕らに教えたということに他ならないだろう。

敵の得体が知れない。敵が何を考えているのか読めない。

実に嫌な展開だ。

勇者がいる以上、正面からの戦闘ならまず負けないが、絡め手だつたらどうなるかはわからない。勇者は最強だが、藤間君本人はただの学生だ。つけ入る隙は幾らでもある。僕らをここまで招き入れたということは、天下無双の勇者に打ち勝つ術があり、敵はそこに賭けている筈だ。

十中八九、何かが起こる。

## 2・5（後書き）

あけすぎです。おめでとうございました。

三か月以上更新がありませんを未然に防ごうってことで久々の更新です。相変わらず遅筆です。すみません。

第二話は「陰謀渦巻く辺境編」

場面転換や説明が多い回だったので、わかり難ければそう指摘して頂けるとありがたいです。

青色眼鏡

勇者様御一行は街の人間から歓待を受けた。

めかし込んだ街娘たちが藤間君をぐるりと取り囲み、その一挙手一投足に黄色い歓声を上げる。輪の中心にいる藤間君は照れ臭そうに笑いながらも、まんざらではない様子。有名人気分ってわけ。

勇者召喚はこの世界の人間にとってかなりの関心事だ。だから、王都で行われたく帯剣の儀でもそうだったように、それはある種の祭りへと発展する。どこぞのスターが来日、といった感じだろうか。勇者は謂わば芸能人の様な扱いを受けているのである。

召喚されてすぐ、王都の周辺部からは勇者を一目見ようと人が大挙して押し寄せた。これが辺境ともなれば、中々目にするのがない勇者への注目度は自然と増す。そうやって出来あがったのが、この人混みというわけだ。

あー、羨ましい。路傍の石も同然な扱いの僕に少し分けて欲しいね。

そんな中、姫様やその他の女性陣も、街の人間から熱い視線を注がれていた。綺麗所が集まっているのだから、当然そうなるのも頷ける。美しい女性に男が群がるのは、世界を超えても通用する普遍的な価値観ということらしい。

僕同様に寝不足な僕も、腑に落ちないものを感じているらしい観那も、ここは一先ず人々の期待に応えることにしたようだ。

そうやって、自分を除いた面子がきやーきやー騒がれている間、手持無沙汰な僕は睡魔と格闘しながらボーっと立ち尽くす他ない。というか、明らかに僕は勇者様御一行だと思われてないよな。

通常なら四人編成なのだから無理もないけれど。

「駄目だ。暇で暇で死んじゃう……」

「だったら、私と遊んでくれませんか？」

僕がこぼした愚痴に反応が一つ。

疲れきった僕の幻聴でなければ、背後から聞こえたのは小さな子どもの声だった。

「勇者のお兄ちゃんにお願いしなよ」

相手の方を振り返りもせず、しっしと追い払う動作を試みせる。

いくら暇だからって子どもの遊び相手なぞご免だった。

「お兄さんがいいんです」

「僕なんかと遊んだってつまらないよ？ 勇者みたいに凄い力を持っているわけでもないし、おまけに酷く疲れてるからね。勇者に頼めば分身くらいは見せてくれるかもしれない」

適当なことを言っただけであしらう。

それでおしまいかと思っただけが、

「勇者はきつと私の相手なんてしてくれませんか」

なーんて、拗ねたような調子で返されてしまう。

「どういふことかな？」

「駄目な私には駄目なお兄さんがお似合いということですよ」

ひょっとして僕は馬鹿にされているのだろうか。

というか僕はそんなに駄目な奴に見えるのだろうか。

ちよつと凹んだ。

「あのね」

面と向かって人に悪口を言っただけはいけません、言うなら本人のいないところでこっそりやりなさい、と教えてやるつと振り向く。

そこにいたのは案の定子ども。

十歳くらいだろうか。無地の班袖に短パンという装束、小奇麗な顔をしているせいか、性別は不詳。そして 全体的に薄汚れていた。

「ついさっきまで外で遊んでた？」

「本当にそう思います？」

いや、思わない。

棒切れのように細い手足や、こけた頬から普段の生活は一目瞭然。

頭の天辺から爪先まで、じーつと観察する。そんな僕を真っ直ぐ見つめ返してくる。

「へえ、豊かな街だと思つてたけどね」

「豊かな街ですよ。少しの例外がいるだけで」

「いやいや、本当に豊かなら、君みたいに可哀想な子どもを放つておかないだろう?」

「お兄さん、ここは辺境ですよ? 王都の人間の高潔な精神が田舎者にまで当て嵌まるなんて思わないでください」  
随分ヒネてるなあ。

この年でこれじゃあ将来が心配だ。

思わず溜め息を吐いた。

「それで。憐れな哀れな子羊ちゃんは、この僕になにをご所望のかな。まさか本当にただ遊びたいだけなんてことはないだろ?」

「ええ、勿論です神父様」

挑むように僕を見る。

幼い容姿には似合わないシニカルな笑みを湛え、

「私を買ってくれませんか?」

そう言った。

身売り。

この内容は概ね予想通りではあつたけれど、よりもよつて僕がその買い取り先選ばれたというのがわからない。見るからに金を持っていそうな奴ならもつと他にいるだろうに……。

「生憎、僕は大きくしてお金を持っていないよ」

「一緒にいて、養つてくれさえすればそれで構いません」

「それだつて他を当たつた方がいいんじゃないかな。はっきりいつて、僕は君が言った通りの駄目な奴だぜ?」

「出来ることなら私もそうしたいんですけどね。お兄さんじゃなきや、私を買つてはくれませんか」

「悪いけど、僕だつて君を買う気はないよ」

もうこれ以上、足手纏いを増やすつもりはない。

そういうのは姫様で十分。

だというのに、この子の余裕は崩れない。

「いえ、必ず買いますよ」

「どういうことかな？ 僕はこれでも神父だからね。いくら君が可哀想な子だとしても、率先して人身売買をするつもりはないよ」

勿論、完全に嘘。

利益がないからやらないというだけ。

立場なんて後付けの理由に過ぎない。

むしろ本当に慈悲深い聖職者なら、自らの立場を投げ打つてでもこの子を助けるべきなんだろう。僕が今まで見てきた連中の中にはそんな奴は一人もいなかったけど。

「お兄さんが私を買えば、私が出持っている情報を知ることが出来ます」

「情報？」

「例えばそうですね。『この街の秘密』とか」  
なるほど、そういうこと。

確かにこの街に秘密があるのは間違いない。

後ろ暗いものがあると勘繰っている僕にとっては非常に魅力的な提案ではある。

とはいうものの

「それってさ。君にとってはかなり不利な提案じゃないかな？」

「そうですね。私が提示できる利点はお兄さんに情報を話した時点で失われてしまう。土地勘を情報の中に含むとしたところで、お兄さんがこの街を去る段階でそれも完全に失われてしまうでしょう。私を保護する意味がなくなったとき、お兄さんが私を見捨ててしまわない保障はどこにもありません。これは、私にとって端から非常に不利な取引です」

「ご明答。じゃあ、そこまでわかったんだ。僕が言いたいこともわかるよね？」

「そこまでしてお兄さんに取り入る理由がわからない。もっと言う

ならば、どう考えても怪しい、これはあなた方を陥れる罠かもしれない、そんなところでしようか」

「正解」

最近の子って頭良いんだなあ。

もしかすると、栄養不足で発育が不良なだけで、実際はもっと年齢が上なのかもしれない。

「じゃあ、逆にお兄さんに質問です。私がそこまでしてお兄さんに取り入る理由はなんでしようか？」

今すぐに保護者を手に入れなければならぬ理由。

僕が保護したこの子を守らざるを得なくなる原因。

「差し迫った危機　それも僕まで巻き込まれるようなドでかいやつがある、とかそんな理由かな？」

大穴で、色香を用いて僕を籠絡する自信があるとかそんなところ。

「ご明察です、お兄さん」

どうやら、僕の答えはこの子を満足させられたようだ。

「さて、御聡明なお兄さんのことですから、どうすることがお互いにとって一番良い結果をもたらすかはわかりますよね？」

得意気な笑みを浮かべたまま、僕に問い掛ける。

自分の勝利を確信した表情。

うへえ、こりゃ完敗だ。

「負けたよ。君を買おう」



「あんた最低！ ばっかじゃないの！」

「こんなちっちゃな女の子を買って……」

「勇者の仲間が犯罪の片棒を担ぐとは。父上も存外人を見る目が無いのう」

上から順に、観那、藤間君、姫様。

女の子を買うことにしました、という僕の宣言を受けて皆が見せた反応は、怒りや軽蔑を通り越し、呆れに近かった。

ま、無理もない。

僕だつて藤間君が「この子を買うことにした」なんて言い出したら、大喜びで槍玉に上げるもの。「勇者が幼い女の子を買ったぞー、蛆虫にも劣る最低の変態野郎だー」つてさ。

その後、晴れて女の子の保護者になった僕は、宿に通された勇者一行に合流することにした。ところが、街の人間から勇者一行だと思われていない僕（おまけに子連れ）が賓客滞在中の宿に入るのは一苦労。おかしな奴だと勘違いされて騒ぎになりかけ、仕方なく正攻法を諦めて云々し、どうにかこうにか彼等のいる部屋まで辿り着いた時には、溜まりに溜まった疲労も手伝って、もう指一本動かしたくないくらいにまでなっていた。

とはいえ、連れている女の子の素性を説明しないわけにはいかない。

本当の購入動機を隠したかった僕は、確実に厄介事になるのを予期しながらも、そこを伏せいいかげんな事を言うことにした。そして、結果はやっぱりこの様。罵詈雑言の嵐である。

信頼ねえなあ、僕。

「あんだね、自分の職業忘れたの？ 聖職者よ、聖職者。いくら落ちこぼれでも、こんな真似するなんて、ほんと信じらんない！」

ばっくれた自分が悪いとはいえ、妹に言われるのは結構傷つく。ていうか、身内にまじで人身売買すると思われる僕の人生ってなんなんだろうね。

「あんたがこんなことしたって、父さんと母さんに何て伝えればいいのよっ！」

「観那さん……」

「最低の屑じゃな」

正に四面楚歌。

僕の株大暴落。

観那は怒りつつも僕の行為に本気でショックを受けてるし、姫様は僕をゴミでも見るような目付きで見てるし、藤間君は やっぱ「これが、異世界の厳しさ」とでも思ってるのかね。異世界なんてそんなもんだよ。さっさと夢なんか捨てちまえっつての。

そんな中、僕だけは僕を責めるでもなく弁護するでもなく、ただニヤニヤ笑ってこの状況を静観していた。こいつなりに何か考えがあるんだろうが、とりあえず後で殴ろう。

皆がヒートアップしていく中、僕は唯一の味方である女の子に小声で話しかける。

「いやー、うん。なんていうか、やばいね、僕の立場。超ハンパねえよ」

「……ハンパ、ねえ？」

「異世界語だから気にしない」

「ああ、お兄さんは立場どころか頭も駄目な人なんですね」

「返品してもいいかな？」

「駄目ですよ。責任は取って下さい」

溜息を吐く。

「めんどくせえ」

僕に反省の色がないことを悟ったせいも、観那の怒りはさらに激

しさを増している。姫様の視線は冷たくなる一方だし、藤間君まで何か僕のことを軽蔑し始めてるっぽい。

どんどん不味くなる状況。

この分じゃ、直に爆発するだろう。

「大体が『ムラムラしたから買った』なんて言うからいけないんですよ。保護でも何でも、もっとマシな言い様があるでしょうに」

「だって、それくらい言わないと仲間から追い出されないじゃん」

「お兄さん、そういう嗜好があったんですか」

「嗜好って言うか、そうしなきゃやってけないからさ。つまり、最早必然なの」

「このド変態ッ！」

「……………」

「あれ、悦ばないんですか」

「悦んで欲しいの？」

「いいえ、それは困ります」

心底嫌そうな様子。

だったら言うなよ。

今度は女の子が溜め息を吐く。

僕に買われて、生活が安定するかと思いきやこれだもんな。無理はない。ちよつと可哀想だけど、我慢してもらわなきゃ。情報とやらを聞きがてら、後で食事くらいはきちんと宛がってやるう。

「ちよつと、独！ あんた私の話聴いてんの！？」

僕と女の子が話している間に、とうとう観那の怒りは限界突破したらしい。ここまで起こっているのを見たのは本当に久しぶりだ。

「ま、まあ、観那さん。いくらなんでも、独さんだって考えあつての行動ですって。ですよね？」

「そりゃあ勿論。決まってるんだろ。大きい子より小さい子の方がいいなー、とか僕もいろいろ考えた上での行動さ」

慌てた藤間君がナイスパスを繰り出す。

待ってましたとばかりに僕はゴールを叩き込む。

これぞ感動のフィナーレ。  
凍り付いた空気に溢れる涙が止まらない。  
さらば勇者様御一行。

今の今までありがとう。

僕は独りで生きて行きます、これからも。

\*

「あー、くっそ、体中痣だらけだ。めっちゃくちゃ痛いぞ、これ」  
観那に杖でしこたま殴られたせいで、全身がずきずきと痛む。魔法が存在するこの世界じゃ、後衛専門の観那の打撃だつてかなり堪えるのだ。おまけに手加減なしだからやってられない。

ボコられた後に、晴れてクビを言い渡された僕は、観那たちの妨害に負けじと女の子を奪い去り、無事脱出。咄嗟のことで藤間君が反応出来なかったのは本当に助かった。勇者とガチンコするなんて真似は絶対にご免だ。僕じゃ一秒も持たないつての。

そんなこんなで、今僕らがいるのは、とある酒場兼宿屋の一室。ついさつきまでいた部屋ほど豪華じゃないが、最低限の衛生は確保されているし、食事だつてそう悪くはない。その分ちよつと高いけど……ま、少しは贅沢したつていいだろう。こんな様だが、僕とて立派な社会人だ。多少の持ち合わせくらいはあるのである。

今は、小さなテーブルに女の子と向かい合つて座り、並べられた食事をかきこむ彼女をぼーっと眺めている。女の子は余程お腹が減っていたのか、食べる食べる食べる。小さな体のどこに入るんだつてくらい量を詰め込み続けている。僕はといえば、そんな彼女の様子を見ているだけで満腹になつてしまった。実に勿体無い。

「さて、と」

女の子が食べている間に、やれることはやっておこうと椅子から立ち上がる。

聴力を強化　床に耳を付け、音を探る。

足音から察するに、この店の主人を除いて、周囲に人はいない。街中が勇者様歓迎会で手一杯というわけだ。これから内緒話をする僕らにとっては、都合の良いことである。念の為辺り一带に魔力をばら撒き、警戒は怠らないようにしておく。体調最悪で、ここまで気が利けば上出来である。

元々カスみたいな魔力量しか持たない僕は、さすがにこれでガス欠。全身の打撲治療は明日まで我慢する他ない。平々凡々な僕では、観那や夢のようにはいかないのだ。ちくしょうめ。

「ごちそうさまでした」

そうこうしている内に、女の子の食事が終わった。

膨らんだお腹を満足気に叩きながら、幸せそうな顔をする。

「何日くらい食べてなかったの？」

「二日振りです」

随分とハードな生活だ。

僕も修行期間中に一週間食事抜きとかやられたっけ。一緒にいた同期のやつらはちゃんと食べてたみたいだから、明らかに虐めだよな。

「よし、それじゃあ、一心地ついたところで、自己紹介といこうか。よくよく考えたら、まだ君の名前も訊いてなかったもんね」

「生憎と私に名前はありませんけど」

「……………あー、路傍の石に名前なんていらないもんな」

「その通りです。お兄さん」

随分とネガティブだな、おい。

「でも、今はそれだと不便なんだよ。何なら僕が適当な名前付けてやるっか？」

「遠慮しておきます。お兄さんの適当はテキストの間違いでしょう。」

酷い呼ばれ方をするのは嫌ですから、自分で付けますよ」

「そいつは残念」

色々良さそうなのを考えてたのに。

「私は自分の名前を考えていますから、その間にお兄さんが自己紹介して下さい」

「お前聞く気ないだろ、それ」

「滅相もない。ただ、短い付き合いとはいえ、お兄さんのことはもう随分理解しているつもりですから、そんなに身を入れて聞くまでもないかと」

「僕ってそんなにわかりやすいか」

「ええ、重度の変態で重度の捻くれ者ですよ」

「後ろはいいとして、前は何だ」

「違うんですか？ わざわざ自分の妹に罵倒されたがるなんて、余程倒錯した趣味の持ち主なんだと思いましたけど」

「おいおい、なんて誤解だよ。」

「いや、あれは僕にも一応考えがだな」

「わかってます。冗談です」

「ふふん、と女の子が笑う。」

「うぜえ。」

「こんな子どもに嘗められるなんて、僕も丸くなったもんだ。」

「誰が主人か教えておく必要があるな、これは　　って、ん？」

「なんだ」

「部屋の傍に何者かの気配がある。」

「本当に微弱だが、間違いない。」

「僕の撒いた魔力に感知されないよう、自身の魔力で隠蔽しているようだが、身体的な存在感は隠し切れていないようだ。呼吸や衣ずれによる僅かな音が聴こえている。」

「つーか、この感じは。」

「儚じゃないか」

「やっぱりばれちゃったっすね」

扉を開けて謎の気配の正体 儂が部屋に入ってきた。

おさげを弾ませて、なんだかやけに楽しそうな様子である。

こんなところで何やってんだ、こいつ。

歓迎会はどうしたよ。

そんな僕の考えは余所に、儂は、

「話は聞かせてもらったす。その名付け、この儂様に任せるす  
！」

と素敵な笑顔と共に、女の子をビシッと指差して吠えるのだった。

2・7（後書き）

4か月ぶりの更新です。  
これからもゆったり頑張ります。



名前が、決まらない。

悩むこと早半刻。

儂の考え出すゲテモノを却下したくなる気持ちはわからないでもないのだけれど、いつまでも首を横に振られ続けると話が進まなくて困る。

幸いなのは、この世界における名前が「姓」と「名」に分かれているものの、一定以上の身分にある人間以外が苗字を名乗ることが出来ないことだろうか。

今の二倍時間をかけるとか絶対にありえねーって。

我慢強い僕でもいいかげんウンザリだ。

そもそも、名前つてそこまで拘る必要があることなんだろうか。

例えば、僕は今の両親に貰った名前 「独」という呼称に大した不満はない。

図らずも、今の僕の状態を的確に表現していることや、僕のが嫌いな連中の揶揄の材料になっていることや、本当のところ「独り」で遅く生きていけるように」という意味を籠めた名前だったということまで 全部含めてどうでもいい。

十何年間別の名前生きて来た僕にとって、今の呼称は偽物だ。

ホンモノの名前じゃない。

一時的な過ぎず、だからそこに意味はない。

この女の子だって、名前がないことがそのまま名前だったのだから、同じことではないだろうか。

とはいえ。

現状を鑑みるに、どうやらそれは僕の勝手な思い込みだったようだけれど。

「あー、御二人さん？ そろそろ決めてくれないと困るんだけど」

「あと、もーちよい待つつす」と儂が答える。

何が任せるだよ、と僕は苦笑いする。

それにしても名前、か。

元の世界を思い出して少し暗くなってしまう。

そんなガラじゃない。

ガラじゃないが、やっぱりそれはどうしたって郷愁を誘う。

元いた世界の生活。

家族や友人はどうしているだろうか。

僕がこっちに引き摺り込まれてから、もう十数年が経つ。時間にズレがなければ、向こうでも同じだけの時間が経過していることになるだろう。つまり、何の痕跡も残さず失踪した僕は既に死んだも同然。皆にとつては遠い過去の存在になっている。帰ったところでおそらく僕に居場所はない。

安っぽい不幸。

我が人生ながら嗤えてくる。

こんなのお話の中だけで十分じゃないか。

お粗末で出来の悪い茶番。

全くやってられない。

やってられないのに、僕はこうして此処にいる。

残念ながら被害者としてしまっている。

今を生きる為に必死に外面を取り繕って。

帰った時の為に必死に内面を守り抜いて。

どうにかこうにか適応して、ようやくこの無様。

向こうで僕が消えたとき、誰か涙を流してくれたのだろうか。

両親はきつと泣いてくれただろう。

友人も親しくしていた奴等の何人かは泣いてくれたのかもしれない。

そして、妹は 怒つたに違いない。

僕なんかとは比べ物にならないくらいしっかりしたやつだった。

駄目な兄貴だとよく叱られた。別段容姿に恵まれていたり賢かったりするわけじゃあないが、僕には勿体ないくらい良く出来た妹だった。

た。

「……………チナツ」思わず、名前が零れた。

「ひーくん、それいただき」

「は？」

「いただきつて、何を。」

「チナツちゃん、これで決まりつす」

「え、いや、それは僕の」

驚きに一瞬思考が停まっていた。

二の句が継げずにいる僕を尻目に、女の子が頷き、儂が「決定」とはしゃぐ。

「御手柄つすね、ひーくん」

「案外センスあるじゃないですか」

「おいおいおいおい、それは駄目だ。」

他の名前ならいくらでも使ってくれて構わない。

「だけど、これは駄目なんだ。」

「……………も、もう少し考えた方がいいんじゃないか」

「こういうのは偶然の出会いが大事なんすよ。チナツちゃんも気に良ってるみたいでよかったじゃないっすか。それとも何か嫌な理由でもあるんすか」

本当のところは絶対に言えない。

でも、他に思いつく言い訳もない。

儂は僕が名前に固執するような人間じゃないことを良く知っているから、これ以上下手に食い下がれば間違いなく不信感を抱かせてしまっただろつ。

「どうする。」

「どうしようもない。」

「……………特に何も。ただ、あんまりあっさり決まったもんだから、本当にそれでいいのかと思ってさ。それより、字はどうするんだ？」

「うーん」儂は少し考えてから、「千の夏でチナツ、どうっすか」そう言った。

妹の名前は知に奈津でチナツ。

発音は同じだが、字面は完全に別物だ。

ここが妥協点なのだと自分に言い聞かせる。

「いいんじゃないか」

「よし、じゃあ今度こそこれで決まりっす」

拳をぎゅつと握り締める。噛み締めた奥歯がぎりりと鳴る。ともすればこぼれそうになる罵倒を無理矢理飲み下し、目の前の、たった今千夏と名付けられた少女をじっと見つめる。はにかむチナツの顔が、今はもう擦れてしまった妹の笑顔と重なってゆらゆらと揺れた。

勇者の付き人になってからというもの、本当に碌なことがない。

千夏の話を纏めよう。

結論からいえば、僕の抱いていた危惧は的中した。この街にはというよりもこの街自体が、反王国を標榜する連中の温床だったのである。王都から遠く、ろくすっぽ管理の為されていなかったこの土地は、逸般人<sup>アウトロー</sup>たちにとって格好の潜伏場所。もともと土地に住んでいた人々は、まともな恩恵を与えないにも関わらず税金だけは搾取する王国より、柄は悪いけれど金はきちんと落とす人間たちを取った。だから今僕らがいるのは完全なアウエー。倒さんと乗り込んだ敵地のど真ん中。過剰なまでの歓迎は単なるフェイクだったらしい。これだから人間ってやつは信用できないのだ。

だが、それ自体は大した問題じゃない。勇者の力を持つてすれば、たかが悪人が束になってかかってこようと蹴散らすのは容易。赤子の手を捻じ切るようなものだ。と事實はどうあれ、少なくとも敵方は思っていたはず。だから解せないのは、端から勝てないとわかっている戦いを挑んできた敵の胸中ということになるのだけれど、その答えはとうに用意されていたらしい。

あの襲撃。

あれは僕らを葬ることが目的だったのではなく、とある事実を確かめる為のものだったのである。

それは 藤間君に人殺しができるのか、ということ。

勇者の圧倒的な殲滅能力が如何なく発揮されるかどうかは、彼が躊躇いなく人を殺せる人間であるか否かにかかっている。人間離れした力というやつは、相手を殺さずに無力化することには適していないのだ。一振りて人の身体を断つ／断ってしまう勇者の剣は、使いに手に相応の覚悟がなければ酷く脆い。今の藤間君では、こぼれる内臓や赤黒い血液を見た段階で良くて嘔吐、悪ければ気絶という才子が待っているだろう。

全ては不覚悟が招く事態。

藤間君が召喚されてから日が浅いことを考えた上で、敵は僕らの対応を見守っていた。

そうすると、あのとときの僕の対処は間違いなく最悪。

血腥い現場と藤間君の接触を全力で避けてしまったことがそのまま、彼の、ひいては勇者様御一行の脆弱さの証明になってしまった。要するに。

勇者の力という虚仮落しが露見してしまったのだ。

重ねてまずいのは、事の成り行きを見守っていた何者かの存在に、僕と儂が気付けなかったということ。下手をすれば、相手方に僕らよりも腕が立ち知恵の回る人間がいる可能性がある。

以上が、千夏の話から吸い上げた要素に僕の推測を交えたものなのだけれど、

「うっわ、まじありえないって、これ。そもそも僕が生き残れるかどうかすら微妙じゃん」

「そうっすね……思ってたよりずっとやばい状況っす」

儂と二人、意気消沈。

がっくりと肩を落とす、どうにか打開策をと苦しい思考を巡らせる。

「藤間君に殺人への忌避感さえなければ万事解決なんだけど、んな甘い可能性は頭から振り払った方がいいよなあ」

「勇者さんは到底人殺しなんかできるタマじゃないっすよねえ」  
頭を抱えている僕らを他所に、千夏は次の話へと移る。

「勇者さんは、人間以外の殺害経験はありますか？」

「ない」「ないっすね」

即答。

彼はきつと獣も殺せないだろう。

千夏が渋い表情になる。

「じゃあこれも耳に入れておいた方がいいと思うんですが 勇者さん、これから竜退治に出掛けることになるはずです」

「え。ごめん、もう一回言ってくれるかな？」

「竜退治ですよ」

そう言ってしまったから、千夏は溜め息を吐いた。

自分で自分の顔面が強張っていくのがわかる。隣で夢が捨て鉢な笑みを漏らす。もはや言葉もない。竜だって？ おいおい、なんつー真似しやがるんだ。

「約束したんですからね。お兄さん、ちゃんと私を守って下さいよ？」

いや、たぶん無理。

2 - 8 (後書き)

前半と後半で文章の質が変わってしまっている気がします。月日って残酷ですね……。

開いた間のわりに分量が少なくて申し訳ない限りです。でも話はちゃんと動いたと思うんです。話は。

次回こそ素早く形になるといいなあ。

「すごい光景ですね」

「うん、まあね」

街に襲来した竜と勇者が戦っている。

住民はすべて避難し、残っているのは勇者一行と彼らを影ながら見守る僕と千夏だけ。

数少ない観客の間に緊迫感はない。

戦っている藤間君は色々と必死なのだろうが、僕らには結果が見えていたから手に汗は握れなかった。勇者が負けるかもしれないなんて、考えるのもあほらしい。

「あと何分耐えますかね？」

「さあ、五分くらいじゃないかな。そろそろ藤間君も覚悟を決めるだろうし」

もちろん、竜という生き物は強い。

吐き出す火炎は鎧を溶かし、人間など一瞬で灰に変える。

鋭い爪は鉄を裂き、有り余る膂力は易々と人体を叩き潰す。

鱗による防御は堅牢で、生半可な剣／魔法では傷一つつけることができない。

魔物の中でも最強クラス。

そんな化け物を、我らが勇者はひとりで相手取ることができず。

それだけの力を持っている。たとえ初陣だろうが関係ない。戦闘経験の不足など圧倒的な基本性能差の前では屑にも等しい。

千夏の話聞いたとき、僕は藤間君が生き物を殺せないと言った。

たしかにいまの彼は竜を殺せずにいる。

しかし、それがなんだというのだろう。



建物を薙ぎ払おうとする竜の尾を剣一本で阻み押し返す。振るわれた腕はご丁寧な爪だけ斬り飛ばして回避。自分に向って放たれた灼熱は不可視の力場で無効化。ここまで隔絶した性能差を見せつけられるとむしる竜が可愛想になってくる。

結末は火を見るより明らかだ。

藤間君が僅かでも勢い付けば容易く竜は死ぬ。

いまは一步を踏み出しあぐねているだけ。さっきから必死で行っている呼び掛け。「もうやめろ」「勝てないのはわかっただろう」などなど選り取り見取りもそろそろ効き目がないと悟るだろう。

戦いが始まってから早十数分。

藤間君の表情は険しいが、それは精神的な負荷によるものだ。怪我がないどころか息すら切れていない。

「お兄さん」

「ん」

「さっきから勇者さんの体がぶれて見えるんですが、これって私だけですか？」

「いや、僕も彼の動きははっきり捉えられないよ。これでも武闘派聖職者で通ってるんだけどなあ……。自信失くしちゃうよね、まったく」

いよいよ覚悟を決めたのか、藤間君の剣が光り輝く。まさに必殺技という雰囲気。

竜が憎々しげに咆哮する。びりびりと空気が震えるが、その迫力もいまや虚しい。

ああ、うん。

この一件は勇者におんぶにだっこでなんとかかなりそうな気がしてきた。アウエーだろうがなんだろうが、藤間君ひとりで全部蹴散らしてくれるだろう。深刻ぶっていた自分が馬鹿みたい。敵がどれだけ策をめぐらそうと、それを根底からひっくり返してしまおうような

存在がいる僕らに負けはなかったのだ。

勇者が剣を振り下ろす。

儚が何かを叫ぶ。

轟音とともに視界が真っ白になる。

断末魔の声が徐々に小さくなり、竜が完全に息絶える。

光が収束する。

視界が元に戻る。

竜が聳えていた場所には、体を縦に断ち切られた男が倒れていた。藤間君がその場にくずおれる。

やられた。

そう思う他なかった。

藤間君が殺したのは魔術で竜に化けた人間。つまり、僕らは彼に人殺しをさせてしまったのだ。それも覚悟が伴わないままで。

竜化の魔術は相当な高等技術だ。使い手はほとんどいない。だから無意識のうちに安心しきっていたのだ、あれは魔物だから大丈夫だろうと。

まんまと罠にかかってしまった。

焦げた臭い。痙攣する肉体。貼り付いた苦悶の表情。

それらは藤間君の心を折ってなお余りある衝撃を与えただろう。

いまの彼は腑抜けだ。

いかに勇者が強くとも、それは肉体面の話。藤間君の精神面までは神様も責任を持ってはくれない。立ち直れないことはないだろうが、いまずぐにというのはいくらなんでも不可能。どうしたって時間がかかる。もちろん、僕らの敵は彼が復調するのを待ってくれるような相手ではない。たたみ掛けるなら間違いない。

「ひーくん！」

儂が焦った様子で僕を呼ぶ。

千夏と共に隠れていた路地から出て、戦いによって少し拓けた通りで儂たちに合流。

姫様と観那は放心状態の藤間君を必死に起こそうとしているが、おそらく効果はないだろう。となると、戦えるのはたった三人僕、儂、そして観那。

「やっぱり囲まれてる？」

「街の周囲をぐるっと。数は数百人規模。住民と盗賊の混成軍つすね」

「住民の方は素人だろうから問題ないとして、盗賊をどうするかが問題か。竜化が使える魔術師なんて化け物がいるのは本当に予想外だった」

「そうつすね、この分だと敵の戦力は過大に見積もった方がよさそうつす。他にどんな規格外がいても不思議じゃないつすよ」

もはや生き残れる気がしない。

たった一人しかいない前衛が僕という時点で詰んでいる。補助・攻撃の後衛は優秀でも、僕一人では前線を維持できない。単純な実力不足はもちろん、昨日から一夜明けたお陰でだいぶ回復したとはいえ、僕の魔力はすぐに底を尽きるだろう。儂という巨砲があっても、これでは宝の持ち腐れだ。

普段なら「仲間のピンチに立ち上がる勇者」という想像は僕を不快にさせるが、このときばかりは藤間君を応援したくなってしまつ。さて、どうしたもんか。

2・9(後書き)

ほそほそと続きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2987e/>

---

ヒトガキユウシャ

2010年10月8日13時59分発行